

佐賀の 野草

上

2月～7月編
貞松光男著



佐賀新聞社

佐賀の野草(上)

2月～7月編

貞松光男著

佐賀新聞社

序にかえて

私が子供のころは周囲に植物や昆虫採集マニアがいたものだが、最近はこちらが減り、代わって社会、生活環境に対する反動からなのか、中高年層の自然志向が強くなっているように思われる。そのあおりを受けて、私も時折、植物観察会等に引き出される。そこで、植物が好きだから、あるいはもっと知りたいから、身近に野草を育てたいから、山菜料理に親しみたいから、歌を詠むのに必要だから、健康保持のためにと、実にさまざまな目的を持って集まっているのを知った。

かつて、日本人は衣食住だけでなく、感性面においても植物に依存するところが大きで、植物が文化を育てたといってもよかった。しかし、現今における植物との付き合いは、生活必需品としてよりは遊びの要素が大きといえれば言い過ぎだろうか。また、植物全体が地球上で果たしている機能が論議されるようになり、それはそれで結構なのだが、先人が長い時間をかけて見いだした、一つ一つの植物が持つ個性的な特徴が忘れ去られようとしているのは残念なことである。

本書は、佐賀県に自生する野生植物について、ある程度分類上の配慮をしながら、それぞれの植物とのかかわりを中心にまとめてみた。独断的とのそしりをまぬがれないかも知れぬが、私なりの思い入れをこめたつもりである。

このような本にまとめることができたのは、小学校、中学校の担任で歴史の面白さを教えていただいた故木下之治先生、貴重種は標本でも個人用は採集を戒められた真摯な植物研究家、故馬場胤義先生のご指導があったればこそである。茲に深甚の謝意を両先生の御霊前にささげたい。

また、本書の出版をすすめていただいた佐賀新聞社出版部にお礼を申し上げる。

平成2年3月15日

貞松 光男



目次

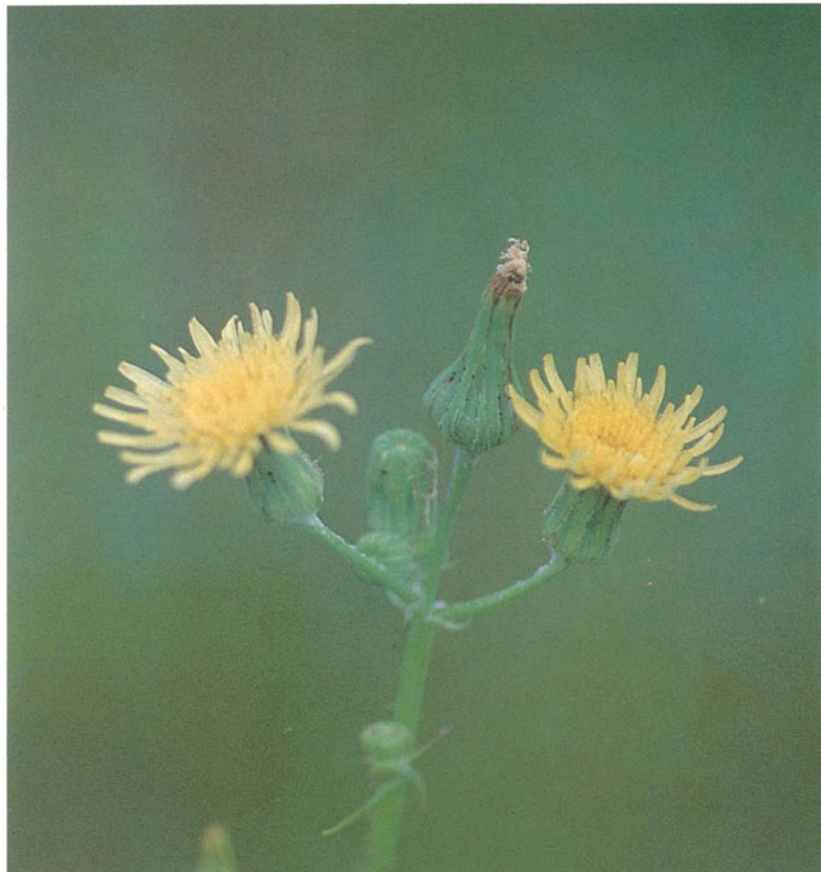
序にかえて	1
凡例	2
2、3、4月の野草	3
5、6月の野草	63
7月の野草	147
科別分類索引	211
50音順索引	215
著者略歴	222

凡 例

1. 本書には佐賀県に自生する草本植物のうち、初春から初夏にかけて開花する256種を収録した。ただし、植物の利用部位や類似種との関係で開花期にこだわっていないものもある。
2. 写真の配列は開花期を中心に2-4月、5-6月、7月に分けた。ただし、開花期は場所や年次によって変動し、また種によって開花時期に長短があるため、一応の目安としていただきたい。写真の撮影月と配列月とが合致していないものもあるが、これは撮影月が平常からはずれているとみていただきたい。
3. 生育地はそれぞれの植物が生育している立地や環境条件を記しているが、これも大まかな傾向を示している。
4. 産地については分布が局在している場合だけその地名なり山地名を記した。生育程度の多少は生育密度と生育地の面積を勘案して示した。
5. 方言はわかっているものについて、多数ある場合は代表的なものだけを記した。方言は場所によって異なるが紙面の都合で呼称地名を省略した。なお、本文中でとり上げた方言は〔方言〕の項にはあげなかった。
6. 類似種は写真がないもので間違いやすいものをあげたが、これはあくまでも主観的なものなので詳しくは他の参考書（例えば馬場胤義編、佐賀県植物目録）をみて欲しい。

2・3・4月の

野草



1989, 3, 21 小城町

ハルノゲシ (キク科)

中空の茎は柔らかくたやすく折れる。折れたところから白い汁が出る。これを乳とよんで、乳の出る植物はウサギが好むと聞かされた。子供のころはウサギを飼うのがはやって乳の出る植物を探しまわったものだ。ハルノゲシは比較的人家に近いところに多かった。一方、アキノゲシは原野や路傍に多い。ウサギに毎日えさをやるにはウサギが好む植物の種類と生育場所を知らなければならなかった。このようにウサギを飼うことによっていや応なしに植物の勉強をしていたわけだ。
花期 4～7月 生育地 路傍、空き地 産地 各地 方言 タンポポ、ダゴヤシ



1986, 10, 19 小城町

オニノゲシ (キク科)

ハルノゲシに比してはるかに豪壮でオニノゲシとはよくぞ名付けたものと思う。葉縁は刺状になっていて触ると痛い。これではウサギもいやがるのではないか知らん。欧州原産で、日本には明治時代に渡来したという。しかし、本県では戦後になって見かけるようになり、特に近年になって増えだした。しかし、ハルノゲシほど1カ所にたくさん生えることはないようである。こういう植生の変化に伴ってハルノゲシとの雑種も見かけるようになった。結構植物の世界も動いているようだ。
花期 4～7月 生育地 路傍、空き地 産地 各地



1989. 2. 20 鹿島市

シロバナタンポポ (キク科)

私の小学校時代の教科書にはタンポポの挿絵があったが花の色は黄色であった。しかし、私の周囲にはどう見回しても黄色のタンポポはなかった。先生から説明を受けるでもなく、また尋ねもしなかったが、随分長い間わだかまりを抱いていた。九州、四国では黄色いタンポポがないところが多いと知ったのは後年になってからである。もっとも、最近では白より黄色のタンポポが目立つようになった。欧州原産のセイヨウタンポポが市街地といわず増えてきているためだ。花期 3~4月 生育地 原野、畑 産地 各地 方言 タンポコ

セイヨウタンポポ (キク科)



1989. 4. 16 佐賀市

コウゾリナ (キク科)



1989. 4. 17 鎮西町

地 花期 4~6月 生育地 原野、路傍 産地 各

花期 4~7月 生育地 山野 産地 各地散在



1985. 5. 11 小城町

コオニタピラコ (キク科)

セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ。これが春の七草。これを全部そろえたいと思う時、一番手に入れにくいと思われがちなのがホトケノザ(コオニタピラコ)らしいが、実はそうではない。裏作をやっていない水田さえ探せばよい。なかに入ると、ロゼット状に葉を地面につけるように伸ばした小さな植物がたくさん目につくはずだ。全体に柔らかそうだが小さいので食べるのに心もとない気がする。この時期、ゴギョウ(ハハコグサ)がもっと小さい。花期 4~5月 生育地 水田、路傍 産地 各地

ヤブタピラコ (キク科)



1987. 5. 4 佐賀市

花期 4~5月 生育地 田畦 産地 各地散在

オニタピラコ (キク科)



1989. 3. 5 小城町

花期 3~5月 生育地 路傍庭 産地 各地



1985, 5. 7 鹿島市

イワニガナ(ジンバリ) (キク科)

田んぼのあぜや道端にあって、茎が地にはい、葉も小さくて低いのでふだんは気にもかけないとはいへども、この植物をみると何かひっかかるのである。庭の草むしりをする時、この植物があるといやな気がしてしまう。むしろうとすると茎がすぐに切れる。全部取り除くのは大変なので中途半端のままにしておくとうちに元通りになってしまう。さりとてグラウンド・カバーにしようという気にもならない。一見弱そうに見せるのが、実はこの草の保身術なのであろうか。花期 4～5月 生育地 畦畔、路傍 産地 各地

オオジシバリ (キク科)



1988・5・14 牛津町

花期 5～7月 生育地 田畦、荒地 産地 各地 方言
ウサギクサ

ニガナ (キク科)



1989, 4. 25 鎮西町

花期 4～5月 生育地 原野 産地 各地



1989. 4. 11 小城市

ヨモギ (キク科)

春先の白い綿毛で覆われた柔らかい草姿から、壮じて厄介な野草のイメージは想像できない。ここでは生長したヨモギにはふれないことにしよう。私のふるさとでは旧暦3月3日に草もちを食べる習慣があった。道路から離れたところのやや日陰で徒長気味のきれいなヨモギの葉だけを摘み、持参の丸い竹ざるに入れる。いくらでもあるなかから良いのだけ摘んで歩く。5月の節句にはススキやショウブと一緒に軒にさす。ヨモギのどこかに魔性を認めたのだろうか私にはわからない。花期 8~10月 生育地 路傍、空き地 産地 各地 方言 フツ、モチクサ



1989. 3. 21 富士町

サツマイナモリ (アカネ科)

杉林、谷川のしぶきがかかるような湿った山中、雨が降れば川になるような山道。いずれも薄暗いなかに白い花がポーッと浮かびあがる。サツマイナモリは群生するので花も一つや二つではない。全体が白くなるほど咲き誇るのだが、控えて陽気さは感じられない。ある時深くえぐられた山道を歩いていると、斜面の両側から私をジーンとみつめるようにして咲いていた。どうして両側から向き合うように咲いているのか、一瞬獵奇の世界にいるように思えた。花期 3~4月 生育地 樹下 産地 各地散在



1989. 3. 9 伊万里市

オオイヌノフグリ (ゴマノハグサ科)

明るい日だまりでは年の暮れから空色の花をつけている。だからといって冬の花というわけではない。春の花の色だ。一斉に開いた花はパラボリアンテナのようで太陽の光を一身に集めているように見える。そのせいか太陽が沈むとこの花の命も終わる。一日花なのである。明治中期にヨーロッパから渡来、今では全国に広がっている。在来種のイヌノフグリはこの勢いに押されたのか今ではほとんどみることができない。しかし、この花も畑の雑草としては後続のフラサバソウにゆずった格好である。花期 1～6月 生育地 路傍、荒地 産地 各地



1985. 4. 21 馬渡島

イヌノフグリ (ゴマノハグサ科)

花期 4月 生育地 原野 産地 各地散在 類似種 タチイヌノフグリ



1989. 3. 5 小城町

フラサバソウ (ゴマノハグサ科)

花期 3～4月 生育地 畑、路傍 産地 各地、欧州原産



1988. 5. 5 東春振村

ムラサキサギゴケ (ゴマノハグサ科)

サギゴケといっても苔ではない。田のあぜなどに20~30センチの範囲に高さ5センチくらいの低さで葉が生い茂り、その上に草姿にしては大型の花をたくさんつけている。目をひかないわけがない。名前に文句をつけても今さらしようがないが名前の持つイメージと実物が合致しないように思う。実はこれに白花品があり、鳥のサギにちなんでサギゴケと名付けられ、その後で紅花品にムラサキサギゴケの名を付けたのだという。白花品はまれにしか見ないように紅花品が母種である。親の名が後につけられたので変なことになった。花期 4~5月 生育地 畦畔 産地 各地散在

トキワハゼ (ゴマノハグサ科)

花期 4~11月 生育地 田畑、空き地
産地 各地



1988. 10. 18 多久市

マツバウンラン (ゴマノハグサ科)

花期 4~5月 生育地 空き地 産地 各地散在、北米原産



1989. 4. 16 佐賀市



1986. 3. 小城町

ホトケノザ (シソ科)

春の花の中には、冬の間も花を咲かせているのが多い。日だまりにはオオイヌノフグリの青色の花に交じってホトケノザのピンクの花も目につく。しかし、何といても春に咲いた花はのびやかで美しい。ホトケノザは大きな群落をつくることはほとんどないが、たまたま畑一面に広がって花が咲いているのを見た。私の座、別名三蓋草さんがいそうは葉の形状に由来するものだが、明るい花の群れは樂園を連想させた。切り花でも意外と長く咲き続ける。花期 3~5月 生育地 畑、路傍 産地 各地 方言 ハイカラグサ



1989. 5. 4 多久市

▲ タツナミソウ (シソ科)

花期 5月 生育地 林縁 産地 各地散在 類似種 コバノタツナミ

花期 5月~6月 生育地 林縁 産地 各地

▶ ツクシタツナミソウ (シソ科)



1986. 6. 8 青螺山



1986. 4. 19 小城町

カキドオシ (シソ科)

無数にある植物にはすべて名前がある。名前の意味がわからなくなった植物も多いし、また、人によって解釈の違いがあるものもある。カキドオシは道端、畑の縁、垣根沿いに生え、短い茎を立て花が群がってつく。花が終わると茎が伸びだして長いつるになる。それが垣根を通して広がる。生態おりの名前だ。別名をカントリソウという。初めは英語かとも思ったが蒴取り草かんとりそうの意だという。茎葉を陰干して子供の蒴の葉にしたらしい。説明を聞いてすぐ理解できる名前ばかりだったら良いのだが。花期 4～5月 生育地 土手、路傍 産地 各地散在



1989. 4. 22 唐津市

フデリンドウ (リンドウ科)

かわいい花を、足で踏みつけそうになって初めて気付くことがある。気付けばよしとすべきかも知れぬ。何しろ10分びんに満たない小草なのだから。貧弱な地下部で地上部を支えているのも小草なればこそであろう。リンドウは秋の花で、一体に秋咲きは花が大きい、春咲きはコケリンドウ、ハルリンドウともに小さい。花もよく似ているが、春咲き種は本県ではフデリンドウだけなのでおぼえやすい。時々、山採りを小鉢へ植えて翌年に芽が出ないのを気にしている人があるがこれは性質上無理。花期 4月 生育地 山野 産地 各地散在



1987. 3. 5 小城町

キウリグサ (ムラサキ科)

春日、植物同好の人を案内してまわっていた時のことだった。淡藍色の小花をつけた植物があり、尋ねられるままにキウリグサと答えると、隣にいた老婦人が口をはさまれた。これが正真正銘のワスレナグサですよ。庭植えしているのはこれを改良したものです、と。たしかに花の形状はよく似ている。しかし、実際は属も異なるし、両者には親兄弟のような関係はないのである。間違った情報ではあるが老婦人にはとっておきの情報だったに違いない。私はこれについて反論できなかった。花期 3～4月 生育地 路傍、原野 産地 各地散在



1984. 4. 28 伊万里市

ハナイバナ (ムラサキ科)

花期 3～9月 生育地 原野、路傍、畦 産地 各地



1989. 5. 28 富士町

ミズタピラコ (ムラサキ科)

花期 5～9月 生育地 山の湿地 産地 各地散在



1989. 3. 26 肥前町

ルリハコベ (サクラソウ科)

玄界灘も4、5月は比較的穏やかな日が多い。そのころ、東松浦半島の沿海地や島々を歩くと草々の葉かげからハッと人の目を射る色の花が咲いている。時には畑の中にも咲いているが、どういうわけか他の地区ではみない。また周囲とはそぐわない花の色だなどと思っていたら案の定外来種で、欧亚大陸原産という。時々、赤い花もみかけるが、これも原産地にあるらしい。微妙に花の色が違うことは写真を撮るようになってわかったことで、日頃の観察不足が恥ずかしい。花期 4～5月 生育地 沿海地 産地 東松浦半島と近くの島に散在



1989. 4. 16 八幡岳

ヤマドリソウ (ムラサキ科)

同じ科のキウリグサ、ミズタビラコ、ハナイバナはいずれも花が小さいのに対しこの花は大きく一つ一つが識別できる。しかも、花茎はほとんどはうので花も平面に並んでみえるためなおさらである。にもかかわらず、小花をつける植物のほうに目がいくのはなぜだろうか。花色が名前のようなり色は少なくぼやけた淡色をしているためか。とはいえ、山に登ってこの花を見ないことには春の山に登った実感がしないという、私にとっていわば指標植物の一つとなっている。花期 4～5月 生育地 山地の陰湿地 産地 各地散在



1989. 7. 30 鎮西町

ヤブジラミ (セリ科)

ヤブジラミとは果実に刺毛があって熟すれば衣服等によくくっつくので、これを虱しらみにたとえたものである。果実がくっつく植物は他にいくつもあって、同じ個所に生えて自分達だけで生存競争をしないように、また、分散して勢力範囲を拡大しようとするためである。人だけでなく動物達もその伝搬役となるので獣道にも多い。ヤブジラミとオヤブジラミはよく似ている。両者で開花時期が2月ほどずれるのでそれが一番の目安となる。花期 4～5月 生育地 原野、路傍 産地 各地 方言 キチギヤー、ニンジンガサ、ヤマニンジン

オヤブジラミ (セリ科)



1986. 5. 25 虹の松原

花期 5～6月 生育地 原野 産地 各地

シャク (セリ科)



1988. 4. 23 高島

花期 4～5月 生育地 林縁 産地 県西部



1982. 5 天山

スマイレ (スマイレ科)

この小さな植物は、どこか人をひきつけるものがある。「春の野にすみれ摘みにと来し吾ぞ 野をなつかしみ一夜宿にける」(山部赤人)「山路きてなにやらゆかしすみれぐさ」(松尾芭蕉)とは作者だけの感懐ではあるまい。スマイレとは一種の植物を指す場合とスマイレ類(属)の場合がある。スマイレ類は花の形がいずれもよく似ていて見分けるのがむづかしい。本県には約20種が知られており、近くの丘を歩いただけで、すぐに4、5種のスマイレ類に出会うはずだ。花期 3~5月 生育地 路傍、野原 産地 各地 方言 スモトリバナ、ドッチョイバナ

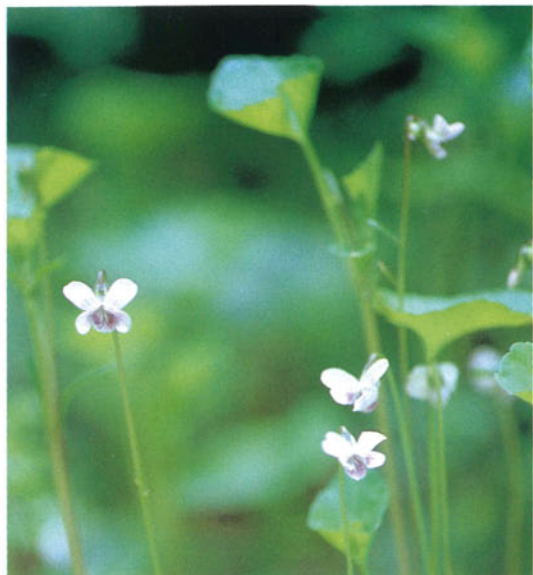


1984. 4. 14 多良岳

エイザンスミレ (スマイレ科)

スマイレの種類は多い。花の形状はよく似ているので区別がむづかしいが、エイザンスミレは葉に特徴があって小さく裂けるので区別できる。さらに花が比較的大きい。芳香もある。しかしこれは身を寄せないとかげないだろう。高い山の落葉樹が多く、日が射し込むようなところ、まだ下草もまばらななかにエイザンスミレの花を見ると、汗をかいているので、一休みして花を見ようじゃないかということになる。花期 4月 生育地 山地 産地 脊振山、経ヶ岳、多良岳等に散在

ニヨイスミレ (スミレ科)



1989. 4. 26 富士町

花期 4月 生育地 湿った原野、林縁 産地 各地

ヒメミヤマスミレ (スミレ科)



1983. 5. 3 多良岳

花期 5~6月 生育地 山地 産地 県西南部にやや稀産



1989. 3. 26 向島

コスミレ (スミレ科)

花期 3~4月 生育地 畑、原野 産地 各地



1989. 3. 21 富士町

ノジスミレ (スミレ科)

花期 3~4月 生育地 畑、路傍 産地 各地

ヒメスマミレ (スミレ科)



1989. 3. 12 小城町

花期 3~4月 生育地 畑、庭 産地 各地

ニオイタチツボスミレ (スミレ科)



1982. 5. 12 浜玉町

花期 5月 生育地 林縁 産地 各地散在

アリアケスミレ (スミレ科)



1989. 4. 17 鎮西町

花期 4月 生育地 原野 産地 各地散在



1989. 4. 30 多良岳

シコクスミレ (スミレ科)

花期 4月 生育地 山地 産地 多良岳に稀産



1986. 4. 19 佐賀市

ノウルシ (トウダイグサ科)

裏作の麦もこれから草丈を伸ばそうとするころ、あぜやクリークの縁のところどころに盛り上がったように密生して黄緑色の花と見間違え葉をつけている。通りがかりの私には美しく見えるのだが、近くにいたお婆さんはこの草の汁は毒だから触らないがよいと言う。生活体験の違いである。それにしても、地史的に新しい沖積台地の、しかもさえぎるものもない平野部のごく一部にだけ分布するのはどういうわけだろうか。考えれば不思議なことだ。花期 4月 生育地 畦畔 産地 東脊振村、佐賀市 方言 チッチグサ、ヤコンクサ

トウダイグサ (トウダイグサ科)



1989. 2. 20 鹿島市

花期 4~5月 生育地 路傍 産地 各地 方言 チッチグサ、ドクバナ

ナツトウダイ (トウダイグサ科)



1989. 4. 14 太良町

花期 4~5月 生育地 山野 産地 各地稀産



1989. 4. 28 鎮西町

レンゲソウ (マメ科)

子供のころ、レンゲソウは水田の稲刈り後に自然に生えるものと思っていた。ところが実際には種子をまいていたわけで、まかなくなった現在はレンゲ畑がなくなってしまった。もちろん、田んぼの片隅には他の野草に交じって花を咲かせている。これをみると、レンゲソウはまだ栽培作物に近く、完全に野生化していないように思われる。ものの本によれば、レンゲソウは有史以前に日本にもたらされたという。だとすると、現状がレンゲソウの安住の状態なのかも知れない。花期 4～5月 生育地 水田、畦畔 産地 各地散在 方言 フーゾー、ホーソーバナ



1986. 5. 25 虹の松原

ハマエンドウ (マメ科)

粉白緑色の葉は確かにエンドウを小型にしたようである。エンドウは支柱にからまって上に伸びるがハマエンドウはもちろんほう。生育はあまり良いほうではなくつるもあまり伸びない。花は赤紫色で美しくのちに青色に変わるが、海岸地帯の主役にはなれない。草姿で見るほどエンドウに近い種類ではないが若葉や未熟なさは食べられる。もっとも、若葉を摘んで食べてみようという気にならないのは、エンドウが念頭にあるからだろう。花期 4～5月 生育地 海岸、砂浜 産地 東松浦半島 方言 イソエンドー



1986. 5. 25 虹の松原

カラスノエンドウ(ヤハズエンドウ) (マメ科)

子供のころを思い出すと、春の植物とのかかわりが一番多かったように思う。どうしてなのだろうか。むつかしい質問はさておくとして、スズメノエンドウも春の植物である。方言を知るとその位置がわかる。ノエンドー、ネコエンドー、ピーピーグサ、フキエンツー、ノボリグサ、ヤムムグラ。他の植物等にかままって伸び、さやは猫が食べる大きさに、種子を取り出したさやを笛にして吹く。これより小型のスズメノエンドウに対しても同じような方言がある。生態が似ているから区別する必要がないのである。花期 4～5月 生育地 原野、路傍 産地 各地



1989. 3. 2 小城市

スズメノエンドウ (マメ科)

花期 3～5月 生育地 原野、畦畔 産地 各地

カスマグサ (マメ科)



1989. 4. 2 小城市

花期 4月 生育地 原野、畑 産地 各地



1989. 3. 5 小城町

ヤマネコノメソウ (ユキノシタ科)

植物の名前には動物の名を冠したのが多い。もちろん、だれでも知っているような動物が中心になる。本種の場合、山猫^{やまねこ}ではなく、山に生える猫の目草の意である。蒴果^{さくかく}を上からみると昼間の猫の目のように半眼状になっている。猫が身近にいたからこそその命名であろう。ネコノメソウの仲間には陰湿地にはうように生えていて気付かない場合が多い。そのなかでヤマネコノメソウは比較的大型で、里近くに生え、しかも群生することが多いので目につきやすい。花時には葉も輝きを増している。花期 4月 生育地 林内 産地 各地散在



1989. 4. 30 多良岳

ツクシネコノメソウ (ユキノシタ科)

花期 4～5月 生育地 山地 産地 八幡岳、黒髪山、多良岳

タチネコノメソウ (ユキノシタ科)



1989. 5. 5 鹿島市

花期 3～5月 生育地 山地 産地 多良岳、経ヶ岳、嬉野町
類似種 コガネネコノメソウ、イワボタン、ネコノメソウ



1989. 3. 9 伊万里市

ナズナ (アブラナ科)

春先の庭、畑、原野等に普通にみられ、春の七草の一つである。本県でこれを食する風習はきかない。むしろ雑草視するむきが多い。冬の間は葉が地面にはいつくばっていつ伸び出そうかと構えている。最近暖房化等の影響で年内に花茎を伸ばしているものもあるが温室内とは異なり貧弱だ。特徴は果実の形状で、三味線のバチに似ている。花梗を引っ張って引き下げ、振るとジャラジャラ音がする。これでも三味線のつもりなのである。花期 3～5月 生育地 路傍、畑 産地 各地 方言 ガラガラ、ネコノシャミセン



1986. 4. 27 加部島

ハマハタザオ (アブラナ科)

ハタザオとはけったいな名である。もちろん、旗竿はたざおのことである。本種が旗竿に特別に似ている点はないように思う。他にもこれと似た植物はたくさんある。たくさんある植物に名前をつけるのに困ったのだろうか。佐賀に分布するハタザオ類のなかでハマハタザオがもっともどっしりとしていて、ヤマハタザオがもっとも長い。これらはいずれも単生するので、ややもすれば見逃してしまう。これでは旗竿の役目も十分果たせるとは考えられないのだが。花期 4～6月 生育地 海岸、山地 産地 各地散在



1984. 4. 23 小城町

タネツケバナ (アブラナ科)

裏作をしていない水田に前年の秋から芽生えて春先になると全面に白い小さな花をつける野草である。密生している割には人の気をひきつけない植物でもある。この花は莢が熟すると急にはじけて種子を遠くへ飛ばす性質がある。しかし、種子の数があまりに多過ぎて密生状態になり貧弱な生育をするところもあり、場所によりかなり異なった形態になる。タネツケバナは種浸花、稲穂を苗代にまく前に水に浸漬するが、そのころに花が開くからという。花期 3～5月 生育地 水田、荒地 産地 各地



1987. 7. 8 伊万里市

イヌガラシ (アブラナ科)

花期 6～7月 生育地 畑、路傍 産地 各地 方言 イソギナ



1985. 3. 20 基山町

スズシロソウ (アブラナ科)

花期 4月 生育地 林縁 産地 各地やや稀産



1989. 3. 21 小城町

ムラサキケマン (ケシ科)

早春、浅山を歩いていると、やや湿った草むらのなかに決まってムラサキケマンが花をつけている。集団で咲いている場合が多いので目につきやすい。さわると柔らかく容易に折れる。春の代表的植物の一つにあげてもよいと思うけれど、なぜか人気がない。どことなくなじみにくい植物が時としてあるものである。そのほうが植物にとっても安心して生育できるというもののかも知れない。この植物は早春に咲く個体から初夏に咲く個体まであり、花期が長い。花期 3～6月 生育地 林縁 産地 各地

ツクシケケマン (ケシ科)



1989. 3. 26 向島

花期 4～5月 生育地 沿海地林縁 産地 東松浦半島沿海地、島

ホザキケケマン (ケシ科)



1989. 4. 4 富士町

花期 4月
生育地 林縁
産地 各地
稀産
類似種 フウロケマン



1983. 4. 13 天山

オキナグサ (キンポウゲ科)

植物好きの大先輩からオキナグサが減少していると思わないかと尋ねられ、20歳以上も年上の子供のころとの比較など私にわかりようはなく返答に窮したが、あるいはそうかも知れない。それは生育に適した、ところどころ土がみえるような向陽の草原が少なくなっているからだ。かれんな花からはオキナグサ(白頭翁)の意味は想像できない。しかし、果時に長く伸びた羽毛が風になびいているのを見ればなるほどと思うに違いない。花期 4~5月 生育地 日当たりのよい草原 産地 基山、雷山、井原山、天山等 方言 クロユリ、ヌスビトバナ



1989. 3. 5 小城市

バイカイカリソウ (メギ科)

本県におけるバイカイカリソウの分布は不思議にもエヒメアヤメの分布とほぼ重なる。本種は厳木、小城、神埼、上峰、鳥栖の天山山地の南斜面にだけ知られているが、エヒメアヤメももともとこの範囲内にあった。前者は温暖帯、後者は中国北部と、主産地が異なるのにかかわらずである。それぞれ南北からの接点だったとしてもなぜ線の分布を示すのか、まだまだわからないことばかりだ。わからないといえば、バイカイカリソウの葉はなぜ非相称なのか。人の気をひくためでないことだけは確かなのだが。花期 4~5月 生育地 原野、林縁 産地 厳木、小城、神埼、上峰、鳥栖の天山山地



1989. 4. 16 八幡岳

ハコベ (ナデシコ科)

冬の間も伸び広がり春には密生する。手につかむと湿っぽい感じが伝わってくる。引き抜くと小さいひげ根がついてくる。包丁で刻むと小さくなる。ヒヨコでもついでに食べることができるなどヒヨコグサの名の由来に納得する。春の七草の一つなのに、これを食べたことがなかった。ある時、画家の家で一杯やろうということになったが、酒のつまみがなかったので、畑に密生しているハコベを料理することにした。大きな鍋にどっさり煮込んだ味は、酒をひき立てるものではなかった。

花期 3~11月 生育地 空き地、畑 産地 各地 方言 ヒヨコグサ



1984. 5. 22 小城市

ウシハコベ (ナデシコ科)

花期 4~6月 生育地 空き地、畑 産地 各地 方言 ヒヨコグサ

オランダミミナグサ (ナデシコ科)



1989. 3. 21 小城市

花期 3~5月 生育地 原野、路傍 産地 各地



1985, 4. 20 小城市

ミミナグサ (ナデシコ科)

最近はおランダミミナグサばかりが目につくようになった。時々ミミナグサをみかけるとゆったりとした優雅な美しさに新鮮さを感じる。ミミナグサを褒め過ぎじゃないかといわれそうだがヨーロッパ原産のおランダミミナグサの騒々しさをみているとどうしてもそう感じてしまう。たぶん、騒々しさに優雅さが負けてミミナグサの生活空間が狭くなっているのだろう。ミミナグサは「耳葉草」で鼠の耳に似た葉を持つ野菜の意とのこと。名前の意を知るとまた見る目が変わる。花期 3～5月 生育地 原野、路傍 産地 各地散在



1989, 4. 4 小城市

ノミノフスマ (ナデシコ科)

ノミノフスマとは^{のみ}蚤用の道具があるとすればこれほど小さいものであろうと、この植物の小ささを表現したものである。それほど小さいかは別にして耕起前の田んぼにはかなり生えていて草姿には大きな白い花をつけるので目立つほうである。かなり生えていても雑草のような荒々しさ、したたかさは感じられない。これと草姿が似た植物にノミノツヅリがある。やや立ち性で硬い。花は小型でノミノフスマのように目立たない。名前が似ているだけに混乱することがある。花期 4月 生育地 やや湿った畑、田 産地 各地



1986. 6. 14 黒髪山

ヒメウワバミソウ (イラクサ科)

このみずみずしい草本植物は山中の陰湿な斜面、あるいはがけに群生する。葉は非対称でケヤキの葉に似たところがある。ウワバミソウは山菜として珍重されるというが、この関東以西型がヒメウワバミソウである。同一植物とみなして食べてみたらくせがなく結構いける味だった。ウワバミソウとは蛇でもいそうな感じのところを生えているからかと思っていたらそうではなく、大蛇が大物をのみ込んだ後、この草を食べて消化を早めるということらしい。今後食い過ぎの後に食べて効果を試してみたい。花期 4~5月 生育地 山中陰湿地 産地 各地散在



1989. 2. 25 小城町

**ツクシスズメノ
カタビラ
(イネ科)**

冬の街路樹の根元だけがわずかに土肌をみせているところにみずみずしい緑が幹に寄り添うように伸びている。畑や道端でも同じ植物を見ることができる。畑では密生して勢いよく上に伸びているが、土の固い道端ではやや横向きに伸びる。引き抜くと土をいっぱいつけてくる。根が張っているためだが除草するには厄介だ。本県では葉舌が短いツクシスズメノカタビラしか見かけない。スズメノカタビラでも良いようなものだが、ここでは植物分類学の教えるところに従うことにする。花期 3~5月 生育地 路傍、畑 産地 各地



1989. 3. 21 富士町

4月、やや暗くて湿った山道の斜面にこの花は咲いている。一つみつかると周辺にいくつも咲いているのに気付くはずだ。かれんさと剛直さ、せん細さと合理性の両面を併せ持っているように思う。花時は文句なく美しい。花が終わると花茎は急に高く伸び、違う植物のように変ぼうする。この仲間は北海道から台湾まで分布し、地域によって変異がみられる。九州にはツクシシヨウジョウバカマだけが分布する。変わったことに、葉先に幼植物が無性的に形成される性質がある。
花期 4月 生育地 林縁 産地 各地散在



1981. 4. 16 八幡岳

ホソバナコバイモ (ユリ科)

早春の高い山に登ると落葉が散り敷いていて林床には意外と日が射しこんでいる。下草はまだちらほらであるが花をつけた植物もかなりある。これら花をつけた野草は背丈が低く、10cm以下のものが大部分である。そして、一般に花が地味である。ホソバナコバイモもその例にもれない。群生することもないので気付かないまま通り過ぎることが多い。そうではあっても、この野草にはひかれる何かがある。花期 3~4月 生育地 山地 産地 雷山、八幡岳、多良岳に稀産



1990. 1. 23 鎮西町

スイセン (ヒガンバナ科)

東松浦半島の、とりわけ海に近いところには野生化したスイセンが多い。広い範囲で群生しているところ。一個の球根からようやく増え始めているものなど、山足、畑のあぜ、道端に点々とみられる。八重咲きスイセンが多いのが特徴でこれには地元もあまり関心を持っていないようにみえる。それはそれで越前海岸のようにあたり一面がスイセンでおおわれるような景色をつくるのもよいのではないかと思う。海岸地帯に多いのは中国大陸から球根が流れついたためと考えられている。花期 1～3月 生育地 路傍、原野 産地 東松浦半島



1984. 5. 1 多久市

シャガ (アヤメ科)

山道を歩いていると思わぬところでシャガの花の大群に出会うことがある。この花は庭や社寺の裏山、竹林などで見かけるので園芸植物の一つと勝手に決めこんでいるが、山の中でもなぜか人が通る道の周囲に多い。幅の広い緑色の光沢ある葉は冬も枯れない。根が四方に踏んばっていないため横を向いたり、下を向いたり行儀が悪いが、花時になるとしゃんとなっているから不思議だ。花は朝開き、夕方にしぼむ。実はつけず、地下茎を伸ばして広がる。花期 4～5月 生育地 林下陰湿地 産地 各地散在 方言 シャガ



1988. 4. 16 帯隈山

エヒメアヤメ (アヤメ科)

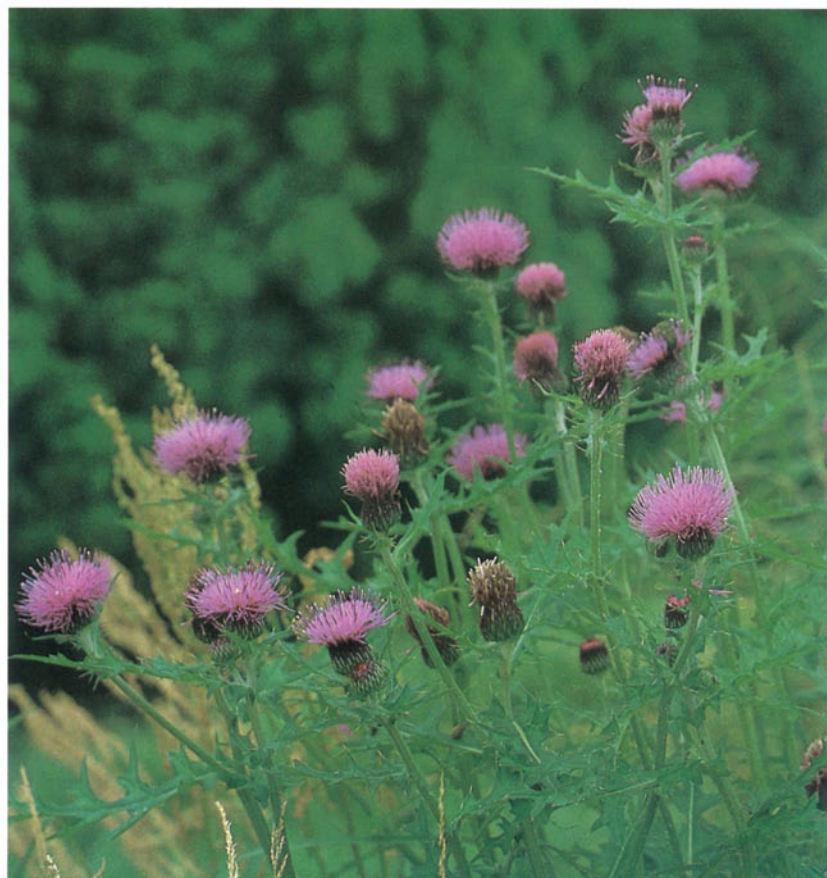
10年以上も前、エヒメアヤメをみたという古い話を確かめるためにある地区を広い範囲にわたって調べ回ったことがある。何年も探してやはりまぼろしだったかと思いはじめたころ、走っている自動車からがけの上の草原に青紫色が一瞬みえたように感じた。執念がそうさせたのか、その時、間違いなくエヒメアヤメだと直感した。この地区から2年後には本当に姿を消してしまった。他のいくつかの産地も同様で、今では天然記念物指定地以外では見るができない。私が罪をつくったような気がする。花期 4月 生育地 草原 産地 小城町から東脊振村の丘陵地



1986, 6. 30 小城町

ヒメジョオン (キク科)

30年以上も前、東京に出た最初の春、野原一面広がるヒメジョオンの白い花と異常に明るいコナラの若葉に異郷を感じた。そのころ、本県にはこの花はないといってよかった。北米原産で日本には明治初年に渡来した。一部地域では大繁殖し、そのころ北九州市でもかなり殖えていると聞いていた。それが、本県でだれの目にもふれるようになるのはここ10年のことである。100年の大計のもとに勢力を拡大してきたともいえるが、なぜそうしなければならなかったのだろう。花期 5～8月 生育地 路傍、原野 産地 各地



1983, 5. 22 小城町

ノアザミ (キク科)

美しい花には刺とげがある。バラは茎に刺があるがアザミの仲間とびは葉に刺がある。だから、アザミによく似た花があってもアザミの類かどうかは葉に刺の有無で判別できる。若葉をてんぷらに揚げたり煮たりすると刺が全く気にならずおいしく食べられるから不思議だ。アザミは秋咲きが多く、春咲きはノアザミだけである。赤紫色の花は遠くからでも目立つ。他植物に抜きこんで生えているのでなおさらである。太陽の光を好むからか、あるいは蝶などの目をひこうとするのだろうか。花期 5～7月 生育地 原野、路傍 産地 各地



1989. 4. 25 鎮西町

ハハコグサ (キク科)

春の七草の一つとして知られている。最近のように太陽暦による正月七日は七草がゆには早過ぎて材料集めが大変だ。そのころ、ハハコグサは地面にはいつくばっていて葉も小さい。5月、花が咲くようになると20^{センチ}~30^{センチ}の高さに伸び、しかも個体数が多くなり、違う植物の感じすら抱く。後年、ナズナだけで七草がゆを代用するようになるのも材料集めに苦労したからであろう。なぜ母子草なのかわからない。似た種類にチチコグサがある。これは葉の上面が緑色だ。花期 4~5月 生育地 荒地、畑 産地 各地散在 方言 コージブツ

チチコグサ (キク科)



1983. 5. 22 小城町

花期 4~5月 生育地 原野 産地 各地

チチコグサモドキ (キク科)



1987. 7. 6 伊万里市

花期 7~9月 生育地 畑、原野 産地 各地散在、熱帯アメリカ原産



1983, 5. 22 小城町

ヒナギキョウ (キキョウ科)

小さな庭、あるいは大きな運動場の片隅に、よく見ないと気付かない細い体で、しかししたたかに生きている。葉は小さいのが基部に数枚あるだけ。細く長い茎の先に青色の小さな花がつく。キキョウに似た花である。群がって咲くこともない。しかし、年中咲いているのではないかと思うほど花期は長い。草むしりをしていてヒナギキョウとわかったからではなく、あまりに貧弱な姿をしているので邪魔にはならぬだろうと思い、つい残してしまう。花期 6~10月 生育地 野原、堤防 産地 各地

キキョウソウ (キキョウ科)



1989, 7. 9 唐津市

花期 5~6月 生育地 原野 産地 各地散在、北米原産

ホタルブクロ (キキョウ科)



1989, 6. 18 武雄市

花期 5~6月 生育地 山野 産地 各地稀産



1989. 5. 23 大和町

ヤエムグラ (アカネ科)

万葉集にこの花を詠んだ歌がある。「思う人來むと知りせばやえむぐらおおえる庭に珠敷かましを」とあるように訪れる人もなく庭が荒れていることを表している。ヤエムグラは何か寄りかかれるものがないと伸びあがれない。だから、庭には前もって他の草が生えていて、これによじ登るようにして茂ることになる。麦畑にはこの草が生えて麦によくからみつく。麦刈り時にこの草の棘にさされるやら、果実が着衣につくやらで悩まされたものだ。花期 5～6月 生育地 家の周辺、畑 産地 各地 方言 クンショグサ、ノボイグサ



1989. 5. 7 小城町

ヤマムグラ (アカネ科)

花期 5～6月 生育地 林縁
産地 各地散在

花期 5～6月 生育地 山地
内高山にやや稀産 産地 県

クルマムグラ (アカネ科)



1989. 5. 3 多良岳



1989. 5. 4 八幡岳

カノコソウ (オミナエシ科)

別名ハルオミナエシ。秋のオミナエシが黄色に対し淡紅色で盛りあがる。新葉はみずみずしくてつやがある。生のままでも食べられそうだ。食べてみようとは何度か摘んで帰ったことがあるが結局試食しなかった。山菜の本を見てもカノコソウの名はない。薬用にされるし食べれないことはないはずだがおいしくないのだろう。8月下旬に根を掘り上げる。これが薬用の吉草根きつせうこんである。ヒステリー、神経過敏症、精神不安症など現代病に効果あるといわれるのだが。花期 6月 生育地 山野のやや湿った所 産地 県中央部に散在



1989. 4. 5 唐津市

キラソウ (シソ科)

あまりにもよく知られた薬草(民間薬)の一つ。ところによって神経痛、胃、打ち身、虫刺されの薬として用いられているが万病に効能があるともいわれる。イシャタオシ(医者倒し)の方言はこの草があれば医者にかかる必要がないので病院が倒産するという意である。同名の方言が、カンアオイ類、ゲンノショウコ、コ克蘭、サンシチソウ、ニワトコにもある。これだけのイシャタオシがあっても病院に影響しているようにはみえない。キラソウは樹園地に多い。花期 3~5月 生育地 樹園畑、路傍 産地 各地散在 方言 イシャタワシ、イラクサ



1989. 8. 22 富士町

ウツボグサ (シソ科)

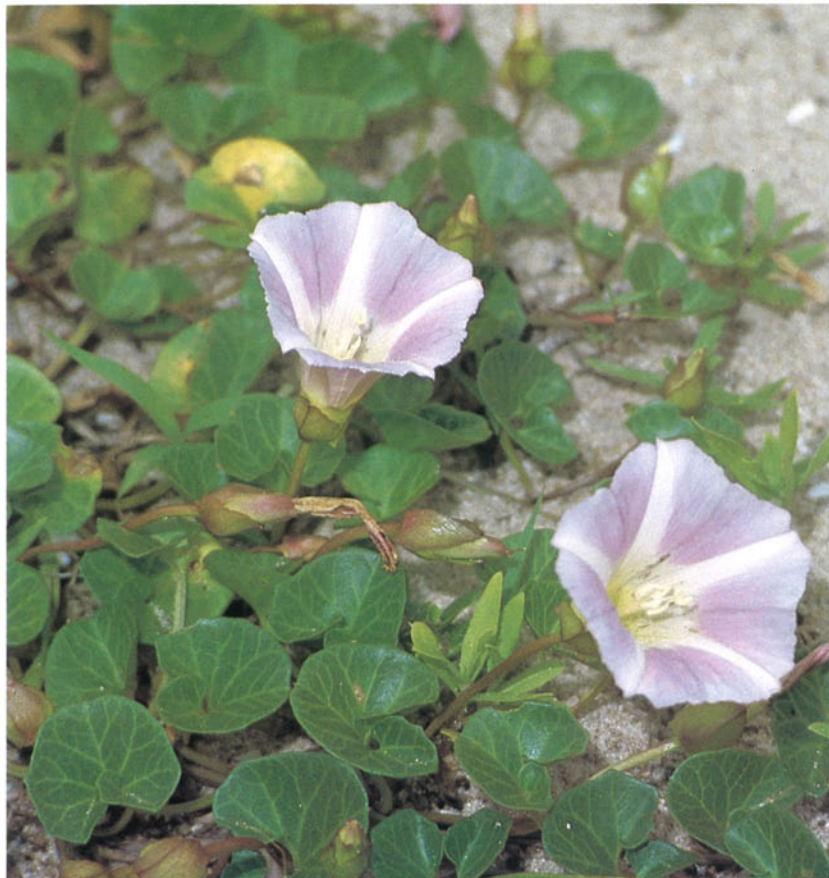
山道の車のわだちに接して見かけることが多い。紅紫色のかれんな花をつける割にはしたたかな草姿に見える。山村ではよくこの草が干してある。これをビニール袋に包んで売っているのを見たこともある。薬用で、子宮炎、尿道炎に効果があるといわれ、また利尿剤としても用いられる。花穂が弓矢を入れるうつぼに似ていることから名で、別名カコソウ（夏枯草）は花後に花穂が黒変することによる。かつて農村で使われた横樋に似ていることからヨコツチバナの方言もある。花期 6～7月 生育地 原野、路傍 産地 各地 方言 カゴソ、ヨコツツバナ



1984. 5. 22 小城町

オドリコソウ (シソ科)

植物に興味をもちはじめのころ、植物の名前を図鑑で調べるのが大変であった。オドリコソウは花をみれば間違えようがないほど特徴がある。名前の由来もなるほどとうなずける。ところが、花がない時に調べようとして失敗したことがある。真冬でも防風樹の下や石垣の上などに寒疲れもなく心臟形の葉を密生させている。いくらか冬型の姿をしていたこともあって別種に同定してしまった。ふだんの観察力の乏しさに恥じ入るばかりである。花期 5～6月 生育地 土手、原野 産地 各地 方言 キッチグサ



1986. 5. 25 虹の松原

ハマヒルガオ (ヒルガオ科)

なぜ汀線^{ていせん}の一番近いところに生えているのか。潮水のシャワーを浴びるのが好きなのか、それとも、そこしか生活の場がなかったのか。砂の上にわずかに葉だけをのぞかせ、ラッパ形の花が首を持ちあげ、どういわけかいずれも海の方を向いて咲いている。そして時には砂つぶに耐えて小刻みにふるえながら、潮騒の運ぶ物語を聞きもらずまいとしているかのようだ。それにしても、地味でもなく、かといって派手でもない健康的な花が一齐に咲く砂浜は生きていると感じる。花期 5～6月 生育地 海岸砂地 産地 東松浦沿岸



1985. 10. 10 小城町

ウド (ウコギ科)

本県では食べる野草の種類が北国に比べれば極めて限られる。食べられる野草が少ないわけではないので生活環境の違いとみるべきであろう。ウドはその数少ない山菜である。山菜というより野菜というべきか。それは野生のものを採るのではなく、畑の隅に植えその上をモミガラ等で厚くおいモヤシ状に生長させて食べるからである。最近では伝統よりも外からの情報に左右されて、食べ方もバラエティに富むようになった。ウドの大木というように大型草本である。花期 7～8月 生育地 原野、林縁 産地 各地散在 方言 シカ、ドゼン



1985. 8. 11 多久市

チクセツニンジン (ウコギ科)

東北地方を旅した時、山村の家の庭にチクセツニンジンの根がたくさん干してあるのを見た。文字通り竹節状の根なのですぐにわかった。薬用にするために採集されたものである。草姿はチョウセンニンジンに良く似ていて類縁関係にある。薬効についてはどれほどか知らない。本県では個体数が極めて少ないのでこれを採集しだしたらたちどころに絶滅するだろう。ちなみに本県でチョウセンニンジンと称して栽培しているのはトウキカウイキョウである。**花期** 6～7月 **生育地** 山地 **産地** 県中部から東部にかけ稀産



1989. 3. 21 多久市

ヤマアイ (トウダイグサ科)

早春の山は低いほうが動きがあって面白い。その日も例によって写真機をかついで山の上まで畑が広がる浅山を目指した。片側は谷川で山の斜面につながる山道を登るとまもなく、緑が濃く光沢のある葉をもつ植物が群生しているのがみえた。近寄ってみると、なおさらみずみずしくおいしそうに見える。この植物を1日乾かすと藍色に変わる。万葉時代は藍色の染料に使われたという。そんなわけで、食べたなら唇が藍色に染まるのではないか知らんと思いつつまだ食べていない。**花期** 5～6月 **生育地** 林縁 **産地** 各地散在



1986. 4. 29 富士町

ヒメハギ (ヒメハギ科)

この小さな花にちりばめられた装飾の意義は何だろう。生物の形態を用、不用の択一的進化の結果として判断してはならないことはわかっているのだが。こんな飾りたてをみていると理解が困難になる。花は生殖器官である。受粉のために虫媒花は虫の気をひく形状、色、におい、みつなどを用意している。ここまでは思考が進むのだが、それではなぜ植物の種類によってそれらが千差万別でなければならないのかとなると途端に思考が停止する。そして、自然の造化は奥深い、というオチになる。花期 5～6月 生育地 原野 産地 各地散在



1989. 6. 5 小城町

アメリカフウロ (フウロソウ科)

フウロソウ (風露草) はゲンノショウコの別名であり、本種も全体がゲンノショウコに似ている。しかし、葉が細裂する、花は小型で淡色である、花期が早い、乾燥地に生える等の点で区別される。名前の通り、北米原産で、日本では昭和初期に発見され、本県では昭和30年代になって見かけるようになった。それが今ではどこにもみられる。アメリカフウロがゲンノショウコ並の薬効があるのかどうか知らないが、たちどころに効能が現れるゲンノショウコが相手だけに試験すればすぐにわかるだろう。花期 5～6月 生育地 原野 産地 各地



1989. 3. 5 唐津市

ムラサキカタバミ (カタバミ科)

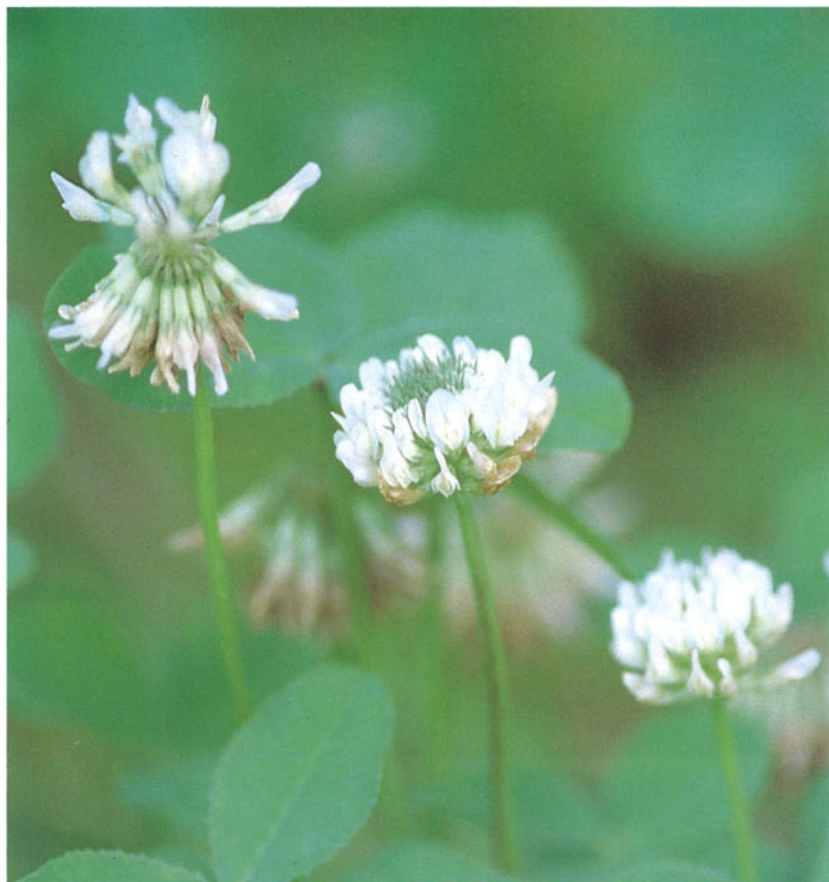
花色にちなむ名と思われるが紫色ではない。カタバミの仲間には大きな花を持つものがあり、これらは観賞用にされる。この花も観賞目的で徳川時代に導入されたという。南米原産種である。ところが花の美しさとは裏腹に、これが畑に入ると、地下部にたくさんの鱗茎^{りんけい}をつくり、一つ一つの植物体になって増え、取り除くのが困難なためいやがられる雑草となる。本県でも初めは観賞用に植えられた形跡があるが、これが野生化して全県的に広がり出したのは20年くらい前からである。花期 6～8月 生育地 原野、路傍 産地 各地 方言 ミツバ



1985. 4. 20 小城町

ウマゴヤシ (マメ科)

名前からして上質の飼料作物を想像する。その通りらしいが、固い地面にへばりついているのを刈り取るのは大変だし、かといって馬が直接食べるにしても口を痛めてしまうのではなかろうか。徳川時代に欧米から渡来したとされ野草化しているが、どこでも見られるというものではない。もちろん小振りのため牧草としても不向きである。最近はこの種に似た植物で、道端に汚黄色の花が盛り上がったようについているコマツブツメクサが増えてきている。花期 4～5月 生育地 路傍、空き地 産地 各地散在

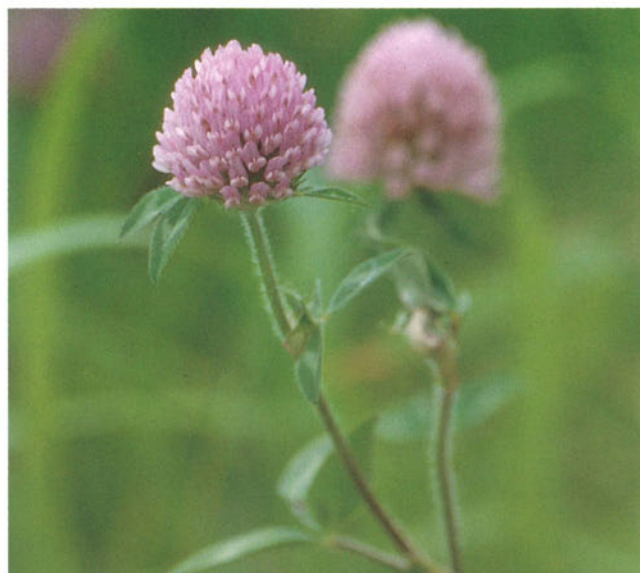


1984. 5. 22 小城町

シロツメクサ (マメ科)

シロツメクサというよりクローバーが通りがよい。クローバーといえば四ツ葉のクローバーが頭に浮かぶ。四ツ葉のクローバーを探そうとしたことがある。一つ見つかると近くからいくつもみつかった。四ツ葉ができやすい株があるということがわかった。ツメクサの名は、弘化3年(1846)にオランダから送られたガラス器具の詰めものにされた草の種子をまいたらこの草が芽生えたことによるという。欧州、北アフリカの原産で、現在みられるのは江戸時代に入ったものの改良種という。花期 4~7月 生育地 畑、原野 産地 各地散在 方言 ミツバ

アカツメクサ (マメ科)



1985. 6. 9 富士町

花期 5~8月 生育地 牧野、路傍 産地 各地散在、欧州原産

ミヤコグサ (マメ科)



1983. 7 脊振山

花期 7~10月 生育地 原野、路傍 産地 各地散在



1989. 4. 5 唐津市

ヘビイチゴ (バラ科)

人のきれいな動物の名を冠しているため、ヘビイチゴは随分損しているように思う。ヘビイチゴと名前を聞いただけで後ずさりする人もいる。確かに蛇がいそうな感じのところに生えてはいる。赤い果実をヘビイチゴと知ると毒々しく感じるという人も多い。実際には無毒なのだが、すべてがマイナスのイメージで受けとられてしまう。白状すれば私自身あまりよい印象を持たない。無毒だと知って試食するのもかなり努力した。もし名前を知らなかったらどう対応していただろう。

花期 4~6月 生育地 野原、畦畔 産地 各地 方言 クチナワイチゴ



1986. 5. 9 多久市

オヘビイチゴ (バラ科)

花期 5月 生育地 原野、田畦 産地 各地 方言 クチナワイチゴ

ヤブヘビイチゴ (バラ科)



1989. 6. 4 富士町

花期 6月 生育地 林縁 産地 各地散在

チャルメルソウ
(ユキノシタ科)

このちょっと人の気をひく名の植物は本県では多良岳にしか産しない。もっともこれに類したオオチャルメルソウやコチャルメルソウは県内でもあちこちの山で見られる。しかし、いずれの種類にも共通しているのは分布している範囲が狭いということだ。なかには、わずか数平方メートルの範囲にだけ分布する植物もあるにはあるが。チャルメルは楽器のチャルメラにちなむ。そんな目でみれば果実の形がチャルメラに似ているようにも思うし、花の形に異国情緒が漂っているようにも思う。花期 5月 生育地 山地 産地 多良岳



1989. 4. 30 多良岳

コチャルメルソウ
(ユキノシタ科)

花期 4月 生育地 山地 産地 県東部から中部にかけやや稀産



▲ 1989. 5. 28 富士町

オオチャルメルソウ
(ユキノシタ科)

花期 5月 生育地 山地 産地 各地 散在



1982. 4 富士町



1989. 6. 5 小城町

コモチマンネングサ (ペンケイソウ科)

ペンケイソウ科は多肉植物が多い。そのため岩上の水が少ない所にも生育している。根を切っても簡単にくたびれない。弃慶草とか万年草といわれるゆえんである。ところが、そんなに性が強いのに葉腋ようえきに肉芽を生じ、これが子苗になるのがある。もちろん、種子からも増える。コモチマンネングサの名の由来だが、本種は水田あぜの畦とか道路に生える。生育状況を見ても密生ではなく、程よい加減である。どうして二段構えの増殖様式が必要なのだろうか。花期 5～6月 生育地 畦畔、土手 産地 各地散在



1989. 5. 5 鹿島市

ヒメレンゲ (ペンケイソウ科)

花期 5月 生育地 溪流の石上 産地 各地散在

ウンゼンマンネングサ (ペンケイソウ科)



1988. 7. 7 黒髪山

花期 7～8月 生育地 岩上 産地 黒髪山、藤津郡に稀産

ワサビ
(アブラナ科)



1984. 4. 8 多久市

10年も前、開発の余波で自生のワサビが日ざらしにあい弱っていたのを家の近くの小川が流れるスギ林に移植した。環境が適していたとみえ花が咲き毎年増え続けた。もっと増やそうと思い手もつけずに見守っていたが、ある年の春、1本も残らず消えてしまった。種子から発芽したばかりという小さな苗まで含めてである。いずれ人が知るところとなり何本かがなくなるのは覚悟していたが、子苗まで持って行かれるとは全く予想していなかった。その後気をつけているが、やっぱり再生はみられない。花期 5月 生育地 湿った山地 産地 県東部散在



1989. 4. 16 八幡岳

ユリワサビ (アブラナ科)

花期 4～5月 生育地 山地陰湿地 産地 各地散在

マルバコンロンソウ (アブラナ科)



1989. 4. 16 八幡岳

花期 4～5月 生育地 山地 産地 各地散在



1984. 5. 22 小城町

オランダガラシ (アブラナ科)

小城町を流れる祇園川は春になるとオランダガラシのみずみずしいかたまりが川一面に広がったこともあった。そのせいか小城町周辺のあちこちの小川にも見られる。それにしても県下全体の河川に広がることはどうしてだろう。清流を好むといわれるがそれだけだろうか。クレソンとよばれステーキには欠かせないものだが、何ら加工することなくそのまま食べられるので急場の酒のつまみに珍重している。欧州原産で、日本への渡来は明治初年であるが、本県では20年くらい前から見かけた。花期 6月 生育地 河川、谷川 産地 三瀬村、小城町、西有田町等



1989. 4. 22 多久市

ウマノアシガタ (キンポウゲ科)

ペンキでも塗ったような光沢のある黄色花が路傍に咲き誇っているのをみると、春の盛りだなと思う。それにしても早春の花は淡い黄色のものが多いのだがこの単色のけげげばしさはどうだろう。チューリップ園を連想してしまう。ある牧場で、この植物だけが生い茂り、風に花がなびいているのを見た。家畜が本能的に有毒植物と知って食べ残したためである。もし、他の牧草と一緒に刈り取って家畜の餌にすると大変なので、ここでは害草と称する。花期 5~6月 生育地 畦畔、路傍 産地 各地 方言 ウマゼー



1985. 8. 11 多久市

キツネノボタン (キンポウゲ科)

ウマノアシガタに似ているがそれほどの派手さはない。生育地もウマノアシガタが原野、路傍と目につく所に多いのに対しキツネノボタンは水湿地などやや引込んだ所に多い。にもかかわらずウマノアシガタ以上に関心があったのは、さらさら流れる春の小川との関係だろう。子供のころ遊んだ川は大きかったと思っていたが今見ると小川か溝である。そこで魚をとるために身をかかめるとキツネノボタンに触った。全体に毛があって気持ち良いものではなかったことが印象に残っている。花期 4~6月 生育地 溝畔、路傍 産地 各地 方言 ウマゼー



1986. 5. 25 虹の松原

**マンテマ
(ナデシコ科)**

玄海側の海浜に覆輪のかわいい花をつけた植物があってハッとさせられる。自生にはおかしいと調べてみると、ヨーロッパ原産で日本には弘化年間に渡来したとある。渡来年代がわかっているということは意識的に導入されたことを意味し、しかも種類も少なかったためであろう。海浜にいつごろ居ついたかははっきりしないが栽培されているのはみかけない。マンテマは外来語に由来するという。語感がよいのか、マンテマの名を冠する植物は多い。本県にもシロバナマンテマ等の他2種がある。花期 5~6月 生育地 海岸砂地 産地 東松浦郡沿海地散在



1985. 5. 11 小城町

ツメクサ (ナデシコ科)

ツメクサを県内ではホタルグサとよぶ。裸麦(大麦)の収穫が終わると穂のついた稈を抜きとりかごを編む。これは用途により、野イチゴを入れるイチゴかごになったりホタルを入れるホタルかごになったりする。ホタルかごにはホタルと一緒にホタルグサすなわちツメクサを入れる。ホタルとツメクサの関係は今もってわからない。ただ、そういうならわしに従っただけだ。ツメクサは庭やその周辺の石積みにつくったやや陰湿地に多い。小さいながらもみずみずしい緑のこんもりとした茂みをつくっている。花期 4～6月 生育地 路傍、庭 産地 各地 方言 ホタルグサ



1989. 3. 26 向島

ツルナ (ツルナ科)

かつて、東京山の手の住宅地を歩いていたら狭い畑にツルナが植えてあるのに気付いた。蔓菜の通り野菜にされることは知っていたが何を好き好んで狭い畑に植えこんだのか疑問が残った。早速、採集して料理してみたが特においしいとは感じなかった。その後、海岸でツルナの群落をみても、もう一度食べてみようという気にはならない。東京での栽培は民間薬にしたのではないかと思っている。花期 4～11月 生育地 海岸砂地 産地 玄海沿岸散在 方言 オカジシャ



1989. 4. 27 相知町

ヒトリシズカ (センリョウ科)

植物も名前次第でずいぶん得をしているのがある。この花も得をしているほうであろう。もちろん、早春、十分に葉が開かないうちに中央に白い花穂をのぞかせている姿は美しい。とはいえ、どうしてヒトリシズカの名が冠されたのか知りたいところである。江戸時代の書に、別名を吉野静よしのしずかと言い、源義経の愛妾、静が吉野山で舞を舞った美しさにたとえて名付けられたと、牧野植物図鑑に解説している。どうしてこの植物でなければならなかったのか。フタリシズカとの対で考えられたのであろうか。花期 5月 生育地 林内 産地 各地散在



1989. 5. 5 多久市

フタリシズカ (センリョウ科)

ヒトリシズカに対比した名。通常花穂が2本で(写真は1本)ことから、静御前の幽霊が2人になって舞い踊ったという伝説にかけたものである。もちろん静御前にたとえられるような花と思うがヒトリシズカほどもてはやされない。全体に大柄になり、葉につやが少ないことによるのだろうか。ヒトリシズカとの区別点は、ヒトリシズカが4葉輪生しているのに対しフタリシズカは2葉ずつの対生。花はヒトリシズカが糸状に伸びているのに対し、それが無いなどである。花期 4~5月 生育地 林下 産地 各地散在

スイバ
(タデ科)

5月も過ぎると新しい学級になれて学校への行き帰りも余裕がでてくる。そこで道草を食うようになる。道端や田の畦にある植物が主な対象になるが、その中には食べられる植物もある。チガヤの幼穂やスイバの茎は代表的なものだ。花をつけるほどに伸びたスイバの茎をしゃぶると酸っぱい味がする。決しておいしいものではないが、しゃぶるのは毎日の行事みたいなものだった。今思い出しても赤味を帯びた茎をしゃぶっていたのでギシギシとの一応の区別はついていたようだ。花期 5～6月 生育地 路傍、畦畔 産地 各地 方言 シノハ



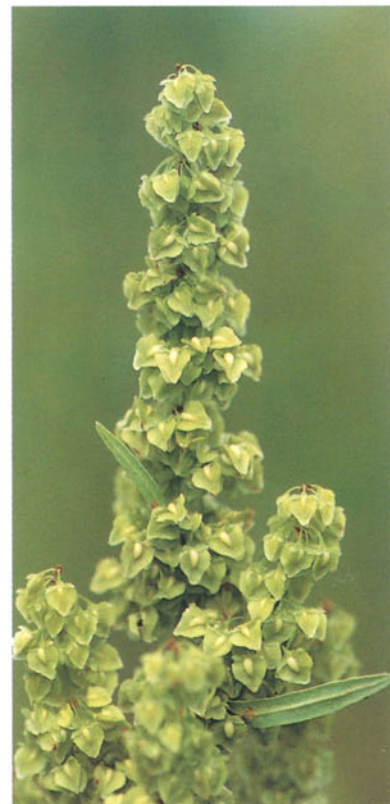
1989. 4. 28 唐津市

ヒメスイバ
(タデ科)

花期 4～5月 生育地 原野 産地 各地散在、欧州原産



1989. 4. 17 唐津市



1989. 5. 4 三日月町

ギシギシ
(タデ科)

花期 5月 生育地 原野、路傍 産地 各地 方言 ウシノギシギシ、シーカンバ、シノハ 類似種 アレチギシギシ、ヒロハギシギシ、マダイオウ



1980. 5. 6 経ヶ岳

アケボノアオイ (ウマノスズクサ科)

秦の始皇帝の命をうけた徐福が一族郎党を引きつれて、有明海から諸富に上陸し、佐賀市千布を経て金立山に至り、そこで念願の不老不死の霊草をえたという伝説はよく知られている。その霊草が方言でフロフシ (不老不死) などと呼ばれるカンアオイ類であることもよく知られている。金立山にはタイリンアオイとサンヨウアオイが分布する。これらは民間薬として利用されているが、不老不死の霊験があったことはまだ聞かない。花期 5月 生育地 山地 産地 各地散在 方言 サイシン、チャンチャンハガマ、フロフキ

サンヨウアオイ (ウマノスズクサ科)



1985. 6. 15 厳木町

花期 4 ~ 5月 生育地 山地 産地 県中央部から南部、東部

ツクシアオイ (ウマノスズクサ科)



1989. 4. 30 多良岳

花期 4月 生育地 山地 産地 県西部 類似種 ウンゼンカンアオイ、タイリンアオイ



1985. 6. 15 厳木町

ノハナショウブ (アヤメ科)

5月某日、古老に案内を請うて奥深い湿原を訪ねた。その日は日曜だったにもかかわらず他に来訪者はなかった。湿原のあちこちにオオミズゴケが引き抜かれ干してあった。痛ましさをおぼえつつ広い湿原を歩きまわってようやく3株のノハナショウブを確認した。その中の1株はちょうど花盛りであった。美しい花色は低地ではどうしても出せないという。それを知りつつも家に持ち帰りた心理はわからぬでもないが、野にあるがままを眺める楽しみまでも奪ってほしくない。

花期 5～6月 生育地 湿地 産地 県東部稀産



1983. 5. 22 小城町

ニワゼキショウ (アヤメ科)

美しい花なのに原っぱなどあまりに普通にあり過ぎて必ずしも評価されていないようである。その証拠に踏みつぶして走りまわっている（もっとも避けて歩けないほど生えていることもある）。ニワゼキショウもそれを予想してか初めは横に伸びる。北米原産で明治20年ごろ植物園に植えられたのが最初だという。それが今ではくまなく広がったというわけだ。花は朝開いて夕方にはしぼむ一日花である。それと見えないほど花がたくさん付く。種子は小さく多量にできる。これが生命力か。花期 5～6月 生育地 原野、路傍 産地 各地



1986. 5. 25 虹の松原

ハマタマボウキ (ユリ科)

アスパラガス (オランダキジカクシ) の仲間であらゆる砂浜にはいる。北西九州だけに分布するが、中でも虹の松原は密度が高い。似た仲間にクサスギカズラ、キジカクシがある。昭和天皇が植樹祭で本県にお見えになった折、3種の異同についてお尋ねになったという。果実の色がクサスギカズラは汚白色、他の2種は赤色。キジカクシは花の直下に関節があるのに対しハマタマボウキは花柄のほぼ中間にある。これだけが区別点ではないが、説明しようとする際際立った特徴が中心になる。花期 5月 生育地 海岸砂地 産地 唐津海岸



1984. 5. 22 小城市

ノビル (ユリ科)

寺の入り口に「葷酒山門に入るを許さず」と刻した石柱が立っていることがある。「葷」は蒜びろのことでネギ、ニラ、ニンニクなど臭気のある野菜を意味する。裏をかえせば、酒とともにネギなどを食べる人が多かったことを示しているのではないか。ノビルは野生のネギ類の意である。本県ではこれを食べるのをいさぎよしとしなかったようだ。山菜文化が発達しなかった一面に、野生のもの食べるのは畑物を食べないほど落ちぶれたとする意識が働いていたのではないかと思う。花期 4~6月 生育地 畑、畦畔 産地 各地散在 方言 センモンネギ、ノンピー



1986. 5. 24 富士町

シライトソウ (ユリ科)

薄暗い林の中の細い谷川に沿って歩いていくと、それは山道の長さ50mくらいの範囲に点在していた。楚々とした白い花だった。薄暗いところでの白はただでさえ目立つものだ。それに花の形もだが名前も良い。シライトソウは日本人好みの名前と思う。全部で200株くらいあったのだろうか。心ない人の目に触れれば一たまりもないだろう。楽しみを分かちたく人を案内して何度か苦い経験をした今は、本当に気心の知れた人達とだけ楽しむようにしている。花期 5～6月 生育地 林地 産地 富士町



1987. 7. 26 彦彦

オオバギボウシ (ユリ科)

ギボウシの類は庭に観賞用として植えられる。性強く、放ったらかしてもよく育つ。この類の主産地は日本であるが、近年は外国で品種改良が進められていると聞く。この花は場所によっては本当に大きくなる。最近は山菜として伸びだしたばかりの、葉が開いていない若芽を食べるようになった。本県でも自生地周辺ではこれを食べる習慣がある。本県には他にコバギボウシとカンザシギボウシが分布する。前者はやや湿った山野や湿原にみられ、後者は多良岳等に分布する。花期 6～7月 生育地 山地 産地 天山周辺に散在 方言 ワカナ



1989. 5. 19 唐津市

ナルコユリ (ユリ科)

弓状にした茎の下に緑白色で筒状の花を鳴子のようにつける。細い花柄に、多い場合は7~8花ぶら下がっている。花は半開のまま終わり、さびしい感なきにしてもあらずだが物理的にかなった咲き方である。細い花柄では花は垂れ下がらざるをえない。比較的大きくて重い花卉が全開状態を保とうとすれば、相当の力と構造的補強が必要である。それがない以上、筒状の花の形が最も自然だという。そういわれてみればなるほどと思う。人は人に都合のよい見方をしがちだが、相手の立場に立つとものが見えてくる。花期 5~6月 生育地 林縁 産地 各地散在

アマドコロ (ユリ科)



1987. 6. 13 七山村

花期 5月 生育地 山地、原野 産地 各地散在 方言 チョーチンバナ 類似種 オオナルコユリ、ミヤマナルコユリ

ホウチャクソウ (ユリ科)



1989. 4. 27 多久市

花期 5月 生育地 山地、原野 産地 各地

シ ョ ウ ブ
(サトイモ科)

ある種の植物との触れあい
が身近になったり遠のいたり
することはよくある。シ
ョウブは残念ながら後者の
例である。現在ではショウ
ブといえばハナショウブと
思いこむ人が多い。かつて、
県内では5月5日の端午の
節句に、ショウブ、カヤ(ス
スキ)、フツ(ヨモギ)を屋
根のひさしに挿して、ショ
ウブ湯に入り、ショウブの
葉で鉢巻きをする風習があ
った。5月5日が菖蒲しょうぶの節
句ともいわれるゆえんであ
る。これらの風習が今後復
活することがあるだろうか。
答えはノーと言わざるをえ
まい。花期 5～6月
生育地 水湿地 産地 各地
散在 方言 ショーブ



1982. 5 厳木町



1989. 5. 8 富士町

ハナミョウガ (ショウガ科)

ショウガ科にはショウガやミョウガが含まれる。ショウガの花はめったに咲かないが20センチばかりの花茎を地上に伸ばす。ミョウガは食する部分が花穂であり地上部に接している。ところがハナミョウガは前年の葉茎の中央部に花茎を伸ばす。花よりも赤く熟した果実が目立つ。冬、かつて小鳥のワナを仕かけていたころ、餌としてこの赤実を用いた。今思えば、本当に小鳥がこの赤実を好んだためか、それとも、この時期最もえやすい赤実なので用いたのかははっきりしない。花期 5～6月 生育地 林下 産地 各地 方言 ヤマオモト、ヤマショウガ



1987. 5. 4 東春振村

マムシグサ (サトイモ科)

この植物に好意を示す人はほとんどいないようだ。生えている環境が陰湿なところで単生するのも印象を悪くしている。かてて加えて赤熟した果実も気味悪く、球茎は有毒ときている。マムシグサは茎にみられる斑紋がマムシのそれに似ていることから名付けられたという。ただ、この仲間の名誉のために付け加えると、ユキモチソウやミズバショウは観賞用として、コンニャクやサトイモは食用にされている。マムシグサも便所のうじ殺しに用いられた。花期 5月 生育地 林内 産地 各地散在 方言 ヤマゴンニャク



1985. 4. 21 馬渡島

ムサシアブミ (サトイモ科)

テカテカ光る大きな3枚の葉を持っている。その葉陰に一目グロテスクな花をつける。人によってはグロテスクというより変わった花という印象をもち、鉢植えにしたりしている。やや明るい林床に生育するため陰湿なイメージから救われている面もあるが、たまたま陰湿地で見るといやがる人が多い。人の好みは環境にも左右される例であろうか。生育地で草姿を見ると南方系の雰囲気がある。専門書には台湾から関東以西に分布するとあった。花期 4~5月 生育地 林下 産地 主として海岸地帯

ツクシマムシグサ
(サトイモ科)



1989. 5. 3 多良岳

花期 5月 生育地 山地 産地 県内の高山に稀産

ヒメテンナンショウ
(サトイモ科)



1989. 4. 30 多良岳

花期 5月 生育地 山地 産地 県中央部から西部にかけ稀産

ナンゴクウラシマソウ
(サトイモ科)



1988. 5. 5 東脊振村

花期 4~5月 生育地 山地 産地 各地散在

オオハンゲ
(サトイモ科)



1989. 5. 19 加部島

花期 5~6月 生育地 林縁 産地 各地散在
似種 カラスビシヤク 類



1989. 5. 4 三日月町

アオスゲ (カヤツリグサ科)

カヤツリグサ科のなかでも特にスゲの類は目立たなくて分類もむづかしい。そういうなかで、人とのかかわりを探るとカサスゲが浮かびあがる。カサスゲは、別名ミノスゲが示すように、この葉を乾かして蓑や笠を作った。時々、葉長が1m以上に及ぶのを見ることがあるが、これが当時の栽培品種であろう。アオスゲはスゲの仲間でも最も普通に見られる種類である。特徴がないだけに見過ごされてしまう。全草が緑色であるためだが、植物の一般的特徴が本草に名付けられたことが象徴的である。花期 4～5月 生育地 路傍、荒地 産地 各地



1988. 5. 5 佐賀市

ゴウソ (カヤツリグサ科)

花期 4～5月 生育地 田畦、溝 産地 各地散在



1989. 5. 13 多久市

アオゴウソ (カヤツリグサ科)

花期 5月 生育地 河辺、溝 産地 各地散在

カラスムギ (イネ科)



1988. 4. 23 高島

作物が作られていない畑に、小さい時は麦に似ているが穂は全く違って子供らがツバメとよぶ植物がまばらに生えていた。燕つばめが飛んでくるころ、燕のような形の果穂をつけるのでそうよんだのであろう。この植物はもともとヨーロッパ、アジア大陸原産であり、かなり古い時代に帰化したと考えられている。最近では以前より増えているようにみえる。これによく似たオートムギは食用にされるが、日本では家畜の飼料としてあちこちで栽培されている。花期 5～6月 生育地 路傍、畑 産地 各地散在 方言 ジネ

イヌムギ (イネ科)



1985. 5. 11 小城町

花期 4～6月 生育地 路傍、原野 産地 各地散在、南米原産

スズメノチャヒキ (イネ科)



1989. 5. 28 久保田町

花期 5～6月 生育地 原野 産地 各地散在



1989. 5. 4 三日月町

チガヤ (イネ科)

原野、路傍にみられ、群生している。その割には花時を除いて注目をひかない。細長い葉が地面から直線的に伸びているだけで形態に変化が乏しいためであろうか。しかし、身近にあって、カヤ(ススキ)の葉のように人を寄せつけないこともない。畑に侵入するとやっかいであるが、根茎は甘く(アマネ)、幼花穂も食する(ズバナ、ツバナ)。また「ツバメオコシ」をして遊ぶ。親しみのある野草ではある。「チガヤくぐり」もそういう中で生まれた民俗行事であろう。花期 5月 生育地 路傍、原野 産地 各地 方言 オナゴガヤ、ツバメ



1984. 5. 22 小城町

スズメノテッポウ (イネ科)

新学期が始まるころの田んぼはまだ田植えには早く乾田状態になっている。そこにレンゲやタネツケバナ、スズメノテッポウが群生している。この中で子供が一番目をつけるのはスズメノテッポウである。花軸をはずして口に含みピーピー鳴らす。太良地方ではこの笛を吹いて遊ぶ時、センバタロー一笛吹ケヤー、オイ(俺)ガチャイコ(太鼓)叩コーデー、と節をつけて歌ったという。意味などどうでもいい。たぶんもうこれを歌える人はいないだろう。牧歌的情緒や道草も失われているのだから。花期 4~5月 生育地 水田 産地 各地 方言 ピーピーグサ



1986. 7. 18 虹の松原

オニシバ (イネ科)

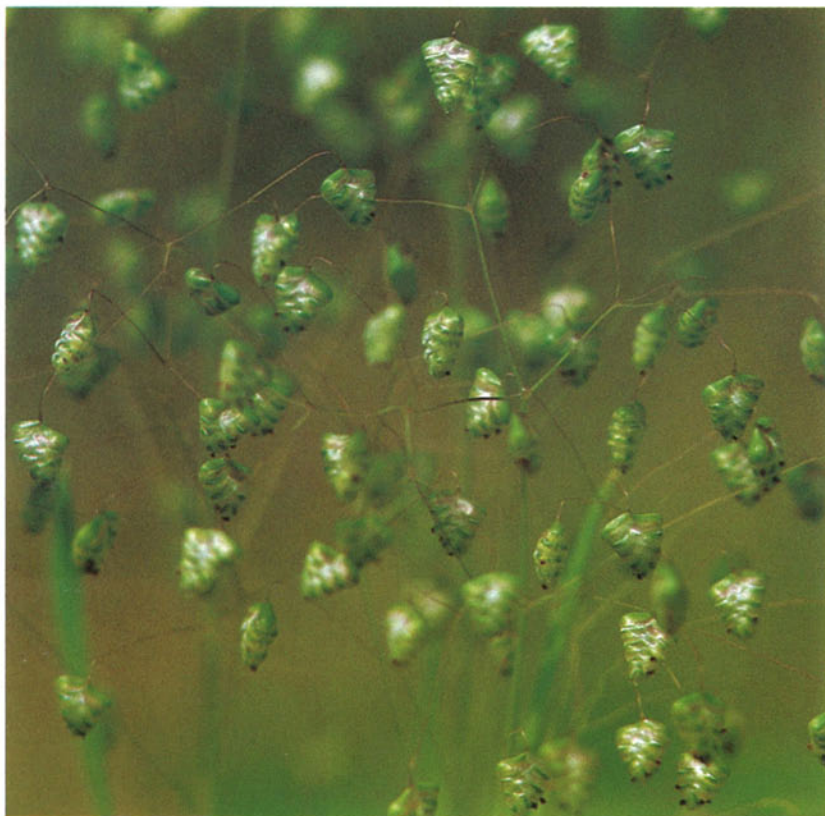
芝地が最近増えている。ゴルフ場造成に伴ってのことだ。ここで使われるシバは野生のシバそのものではない。シバは原野等にみられるが、ゴルフ場や庭に植えられるものとは異なり全体にごつい。海岸地帯に自生するオニシバ、ナガミノオニシバはさらにごつく、乾燥したりすると葉が巻き、刺状になって痛いくらいだ。自然界でのシバ草原は年月を経ると変化する。したがって、純粋なシバ草原を維持しようとするればそれ相当の管理が必要になる。シバは細い葉あるいは茂る葉の意という。花期 6月 生育地 砂浜 産地 東松浦半島



1986. 5. 25 虹の松原

コバンソウ (イネ科)

花穂をみればこばんそう、一名なわらむぎの名前の意味がはっきりする。名前にこだわるでもなく縁起をかつぐでもないが、ドライフラワーにして飾りたくなるような草だ。ヨーロッパ原産で日本には明治時代に観賞用として導入されたという。本県では30年ばかり前に虹の松原の一部で野生化しているのが知られ、その後生育密度は高くなっているが面積はそれほど拡大していない。帰化植物にしては珍しい分布の仕方である。それがどんな原因によるのか私にはわからない。これからも分布の様子を見守っていきたい。花期 5月 産地 虹の松原



1984. 5. 22 小城町

ヒメコバンソウ (イネ科)

コバンソウとは違ってあちこちで見かける。やはり欧州原産である。穂はコバンソウに似るがずっと小さく観賞価値はないので何かにまぎれて入り込んだのであろう。子供のころ、穂の部分をすごいて落とし、細い稈がたくさん付いているのを女の子の髪に巻きつけ、引っ張るいたずらをしたものだ。こんないたずらはヒメコバンソウ以外ではやったことがない。だれか先人にいたずらの天才がいて、数あるうちから選びだしたのだらう。花期 5～6月 生育地 畑、原野 産地 各地散在 方言 スズガラクサ



1989. 5. 7 小城町

カニツリグサ (イネ科)

川ガニを捕るのにカニ穴に手を突っ込む直接的な方法もあろうが、カニの習性を利用した方法は何とも楽しい。私等はずるめて誘い出していたが、それが手に入りにくい山国では自然から探し出す必要があった。試行錯誤の結果選ばれたのが穂が密につくこの草だったのであろう。私はこの草を用いたことがないので釣果の程度はわからない。無論、子供の遊びの要素が大きいものに経済性を論議するのは筋違いかも知れない。資源の枯渇が論議されないのは確かである。花期 5～6月 生育地 草原、路傍 産地 各地



1989. 6. 5 小城町

オニウシノケグサ (イネ科)

5、6月は国道、県道を問わず両側の土端面はイネ科植物で占められる。その中で最近急激に増えてきたのがこの草である。これらはもともと牧草として輸入されたのが大部分であり、その生命力に驚く外ない。オオアワガエリ(チモシー)、ホソムギ(ペレニアルライグラス)、ネズミムギ(イタリアンライグラス)、オニウシノケグサ(トールフェスク)、ヒロハノウシノケグサ(メドウフェスク)と畜産農家にとっては和名よりも英名が通りやすいものばかりだ。花期 5～6月 生育地 路傍、原野 産地 各地

ネズミムギ (イネ科)

花期 5～6月 生育地 原野、路傍
産地 各地、欧州原産



1988. 6. 3 小城町



1987. 5. 4 三日月町

ナギナタガヤ (イネ科)

花期 5～6月 生育地 原野、路傍
産地 各地、欧州、北アフリカ原産



1984. 5. 22 小城町

カモジグサ (イネ科)

冬の間は成植物の粗大さとは比べものにならないようなつややかな緑葉を伸ばしている。路傍や堤防、田の畦などに生えるが類似種があり、なれないと区別しにくい。かつて、女子はこの葉をもみほぐし、根元をゆわえて三つ組や桃割れなど髪結いを覚えながら遊んだものだ。おばあちゃんにこれを再現してもらおうと材料を持って行ったら、これはカモジグサじゃないと言われて恥をかいたことがある。この遊びは全国的なものである。子供の植物遊びには意外と全国共通なものが多い。花期 5月 生育地 路傍、草原 産地 各地 方言 カズラゴシ



1989. 5. 23 大和町

アオカモジグサ (イネ科)

花期 5～6月 生育地 林縁、路傍 産地 各地



1989. 5. 7 小城町

ヤマカモジグサ (イネ科)

花期 6～7月 生育地 林縁 産地 各地

スズメノヤリ (イグサ科)



1989. 3. 26 向島

草野球は文字通り草の生えた原っぱでの野球だが、最近はグラウンドが整備されて少なくなった。少なくともひざまで没するような草原はなくなった。芝生のように刈り込まれたところで、球が飛んでこないとみると退屈まぎれに腰をおろして草むしりをする。そして、びっくりする。スズメノヤリの大きな花穂が何となくたくさん出ていることか。葉はちょっと白っぽく見えるがシバに似ていて、花穂が伸び出してもせいぜい15センチくらいか。草野球には全く邪魔にならぬので気付かなかった。

花期 4～5月 生育地 原野、芝地 産地 各地 方言 サルノタバコ

ヤマスズメノヒエ
(ヤマスズメノヤリ)
(イグサ科)



1986. 4. 29 富士町

花期 4～5月 生育地 山野 産地 各地散在



1989. 4. 24 富士町

ヌカボシソウ (イグサ科)

花期 4～6月 生育地 山麓 産地 各地散在

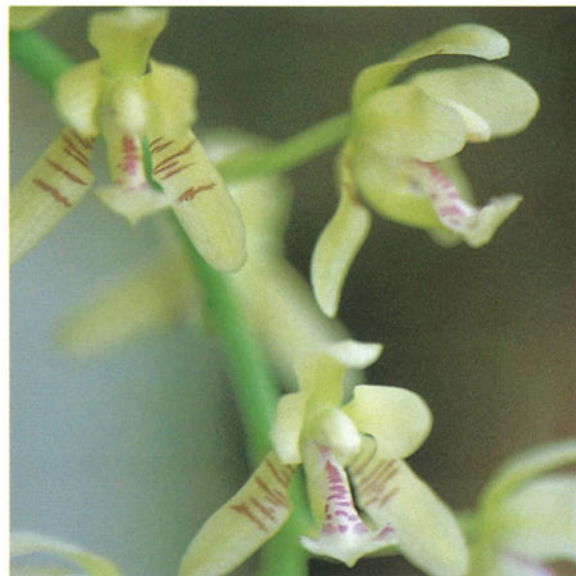


1989. 5. 20 栽培

セッコク (ラン科)

庭に愛培されているのは別として、自生状態のものはほとんどみることがない。ある山村の家の前にあるカヤの大木に密生しているのを見たが場所がら本来の自生かどうか。佐賀市近郊の山に登った時、落ちたスギの枯枝に着生していた。また、伊万里にある山の巨岩の下に枯れかかったのが落ちているのを見た。いずれも上を見上げて他に着生しているのを認めることができなかった。この二つとも私の庭で元気を回復し毎年花を咲かせている。花期 5月 生育地 樹上、岩上 産地 各地稀産

ナゴラン (ラン科)



1989. 6. 5 栽培

花期 6～7月 生育地 樹幹上 産地 塩田町、富士町等に稀産 方言 フーラン

フウラン (ラン科)



1983. 7 栽培

花期 7月 生育地 樹幹、岩上 産地 塩田町、唐津市、黒髪山等に稀産 方言 ササフーラン



1989. 4. 14 太良町

シュンラン (ラン科)

浅山の林床が開けたところであってふだんは見向きもしないのに、4月、花が咲くと腰をかがめて眺めたい。端正で美しい。子供心にも愛きょうのある花にうつった。シュンランの愛培熱が関東地方ほどでないのはあまりにも普通にあること、変化に乏しいこと等であろう。これは、シュンランにとって幸いしたとってよかろう。かつては観賞用としてよりむしろ生活の実用品とみなされていた。冬になると、アカギレの妙薬としてこの根をすりつぶし患部に焼け火ばしでぬったものだ。花期 4～5月 生育地 向陽山地 産地 各地散在 方言 ジシババ、ハクイ

ガンゼキラン (ラン科)

花期 5～6月 生育地 山地 産地 鹿島市、相知町、巖木町等に稀産



1989. 6. 5 栽培



1989. 4. 27 栽培



コケイラン (ラン科)

花期 5月 生育地 山地 産地 多良岳、八幡岳に稀産

エビネ
(ラン科)



1989. 4. 10 栽培

自生状態のカラー写真を撮っていなかったの、探し求めること4年。ようやく友人の案内で数株の花を撮影することができた。その間、かつて足の踏み場もないほど群生していたところでも1株も探せなかったし、昨日までは確かに咲いていたのということもあった。エビネ類は雑種も加わって花の形や色が実に豊富である。そのため、だれがあおったのかエビネブームが巻きおこり、採り尽くされる運命となった。各地の展示会でみる千変万化に自然の偉大さを教えられる。

花期 5月 生育地 林地 産地 各地散在 方言 スズラン、フーズキ

キエビネ
(ラン科)



1989. 4. 27 栽培

キリシマエビネ
(ラン科)



1989. 4. 16 栽培

花期 5月 生育地 林地 産地 各地散在

花期 5月 生育地 山地 産地 主として県西部に稀産

タカネ (ラン科)



1989. 4. 10 栽培

エビネ×キエビネ 産地 各地

ヒゴ (ラン科)



1989. 4. 10 栽培

キエビネ×キリシマエビネ 産地 主として県西部

ヒゼン (ラン科)



1989. 4. 10 栽培

エビネ×キリシマエビネ 産地 主として県西部

サツマ (ラン科)



1989. 4. 10 栽培

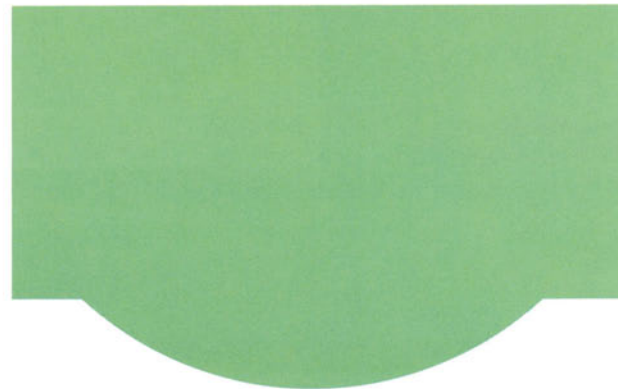
エビネ×キエビネ×キリシマエビネ 産地 主として県西部

Handwriting practice area consisting of 20 horizontal dotted lines.



7月の

野草



ベニバナボロギク
(キク科)

昭和20年代の後半、私が植物に興味を持ち始めたころ、山の伐採地で見なれない草本をみた。師に見せるとダンドボロギクといい（この時のダンドボロギクが実はベニバナボロギク）、昭和20年に唐泉山で採集したことがあるとの話だった。アフリカ原産で、伐採地や山焼きのあとに好んで生える。そして大群落を形成し、やがて減ってしまう性質がある。戦争末期には東南アジアに帰化した本種を葉菜として食したという。たぶん、唐泉山が日本最初の採集地と思われる。花期 7~10月 生育地 伐採地、原野 産地 各地散在 方言 シューセングサ



1984. 10. 20 大和町

ダンドボロギク (キク科)



1989. 8. 22 唐津市

ノボロギク (キク科)



1987. 7. 8 伊万里市

花期 8~10月 生育地 伐採跡、原野 産地 各地散在、アメリカ原産

産地 花期 4~9月 生育地 畑 産地 各地散在、欧州原産



1989. 7. 28 小城町

カラスウリ (ウリ科)

カラスウリの繊細な白い花を見た人はあまりいないのではないか。夜に咲いて明け方にはしぼんでしまっているからだ。日中に花をみたというのはキカラスウリに違いない。あるいはモミジカラスウリだったのかも知れない。モミジカラスウリは別として葉もよく似ており、花ももちろんよく似ている。果実は形、色がそれぞれ異なっているので区別しやすい。黒い種子はエベッサンと呼び、おはじき玉にして遊ぶ。特にキカラスウリの塊根からは良質のでんぷんがとれ、天花粉と称して医薬品にしたり、食用にする。花期 7～8月 生育地 荒地、林縁 産地 各地



1989. 7. 30 鎮西町

モミジカラスウリ (ウリ科)

花期 7～8月 生育地 林縁 産地 各地やや稀産



1986. 7. 27 小城町

キカラスウリ (ウリ科)

花期 7～8月 生育地 林縁、藪 産地 各地散在 方言 ウシゴイ、ゴイ 類似種 オオカラスウリ



1982. 8. 15 多久市

ヘクソカズラ (アカネ科)

ヘクソカズラとはすまじい名前をつけたものだ。古くはクソカズラと呼ばれていたというからやむを得ないと思わぬでもないが。それにしても気の毒だ。別名、サオトメバナと聞くと頭が混乱してしまう。「鬼も18、番茶も出花、ヘクソカズラも花盛り」とはほめ言葉であるが、ほめられた気になるかどうか。それはとにかく、花は名前と無関係に美しいと思う。庭にこの草が入り込めば大変である。地をはい、庭木にからみつく。花が咲く前に取り除かないと家主の面目が立たない。花期 7~9月 生育地 林縁、荒地 産地 各地 方言 ヤイトバナ



1989. 8. 11 鎮西町

ガガイモ (ガガイモ科)

つるを伸ばしている時期は、ヘクソカズラと形状や生態的に似たところがあって見間違ふことがあった。葉は厚くて幅が広く光沢があるのがガガイモと判断がつくようになったが。また、つるを切ると乳液がでるのも区別点になる。果実は牛角をさらに膨らましたようで大きい。これを裂くとなかには白い綿毛がつまっている。種子は白い綿毛の落下傘をつけて遠くへ飛翔する。人はこれを見て、何と優雅な伝播方法だろうと得手勝手に賛嘆するというわけだ。花期 7~8月 生育地 原野 産地 各地散在 方言 カラスノカンマクラ



1988. 7. 18 小城町

山道の車のわだちにも、さらに奥に入った、けもの道のような細道にもオオバコが生えている。道からはずれたところではみかけない。人の往来があるところではないと生きていけないと言えば大げさだが、このような奇妙な習性をもつ、いわゆる人里植物の代表種である。他の植物が生えないような踏み固められた場所でも生育できる結果なのか。学校の行き帰り、この植物でいろんな遊びをした。花茎を用いた目突っ張り、引っ張りあい相撲。葉のホオズキ等々。花期 5～6月
 生育地 路傍、原野 産地 各地 方言 オバコ、ゴーリンゴーリン



1986. 5. 23 江北町

ツボミオオバコ
 (オオバコ科)

花期 5～7月 生育地 原野 産地 各地散在、北米原産



1989. 8. 22 富士町

ヘラオオバコ
 (オオバコ科)

花期 7～9月 生育地 原野、牧野
 産地 各地散在、欧州原産



1986. 7. 19 井原山

キュウシュウコゴメグサ (ゴマノハグサ科)

緑色の葉をもち自身で光合成を行う。根は他植物に寄生して養分をもらう、いわゆる半寄生植物である。この植物は本県のフロラ（植物誌）の基礎を築かれた故馬場胤義先生が昭和12年に初めて天山で発見されたもので、今では中国、近畿地方にも分布が知られている。恩師でもある馬場先生には教えられることが多かった。先生の植物分類にける情熱は晩年ほど盛んになり、新しい学識を吸収して専門家はだしになられた。私も師のそういう生きざまを見習いたいと思うのだが。花期 7～8月 生育地 草原 産地 天山、雷山、井原山



1989. 8. 7 鎮西町

ヒルガオ (ヒルガオ科)

アサガオ、ヒルガオ、ヨルガオはいずれも花の咲く時間帯から名付けられている。ヒルガオは昼に咲く意であるが朝から咲いている。どうして似たような花なのに咲く時間帯がこうも違うのか。咲く時間帯がいかなる要因に左右されるかを実験するには良い材料であろう。三者のうちヒルガオは種子を見たことがない。種子ができなくても白い地下茎による繁殖力のすごさは畑に入ったヒルガオの除草で経験済みだ。どのくらい細切りしても再生するのか、これも実験に値しよう。花期 7～9月 生育地 原野、畑 産地 各地 方言 イオツラ



1984. 5. 20 小城町

トウバナ (シソ科)

今思い出したことだが、子供のころ、虫にさされると必ずキランソウの汁をつけるためにこれを探しまわった。日ごろの経験で子供にもある程度キランソウの生育環境はわかっていた。キランソウが生えていそうな所にはトウバナが決まっていたことだ。他にキツネノマゴもよく出現した。いずれも名前は知らなかったが、そういう随伴植物が生えている所を探すということをやっていたように思う。トウバナもキランソウに似たところがあって間違うこともあったが花があればすぐわかることだった。花期 7~8月 生育地 原野、畑 産地 各地

イヌトウバナ (シソ科)



1985. 8. 30 経ヶ岳

ヤマトウバナ (シソ科)



1985. 8. 30 経ヶ岳

花期 8月 生育地 山地 産地 各地散在

花期 8月 生育地 山地 産地 各地散在



1985. 8. 11 多久市

セリ (セリ科)

春の七草の一つ。若菜を食べる以上新葉が伸びたばかりの柔らかい部分を摘みたい。その点、畑状態のところに生えているのは茎が太くて横にはい、どうしても固くなる。現在、日本にはたくさんの野菜が作られているが、日本原産は5種に満たないという。セリ、フキ、ワサビと並べたててみると主役からはほど遠く、半野菜とでも言いたくなるものばかりだ。セリは、たぶん本県では栽培がなく、そのため自分で川端で摘まないと手に入らない。それだけに楽しみは倍増する。
花期 7～8月 生育地 水湿地 産地 各地散在 方言 セー



1989. 8. 18 小城町

ミツバ(セリ科)

最近、ある人が野生のミツバがあったと驚いた口ふりで話していた。私の感覚ではミツバは野生するものであり、むしろ栽培されることに奇異を覚える。しかし、現実には両方とも事実なのだ。ミツバをワサビ等とともに日本原産の野菜に数える人もいるくらいだ。私には、日本原産野菜は、やはり野生植物の感覚しかない。時々、家の庭に勝手に生えているミツバの葉を摘んでは、やや厚めに衣をつけて揚げる。これは私にとって山菜を楽しむ感覚なのだ。
花期 7～8月 生育地 林縁、原野 産地 各地 方言 ミツバゼー



1986, 5. 25 唐津市

ハマボウフウ (セリ科)

一名ヤオヤボウフウ。八百屋の店頭で売られることがあるから。本県では、虹の松原などを歩くと10年くらい前まではかなり見かけたが最近になって激減した。需要が供給を上回ると自然物の場合は絶滅の方向をたどる。最近では栽培されるようになったので歯止めがかかるだろうか。水洗いが不十分で、小砂がざらつくの、これぞ本場の味だと強がりと言いつつ食べたものだ。花期 6～8月 生育地 砂浜 産地 東松浦半島散在



1989, 7. 10 小城市

チドメグサ (セリ科)

三度の食事と寝る以外は野外で過ごすという少年時代であった。一人で遊ぶことはまれで年齢を超えた集団の遊びであり、そこから多くを学びとったように思う。自然での遊びに生傷はつきもの。少々の血が流れても驚かない。止血剤として用いたのはチドメグサとよんでいたこの草ではなく、ヨモギの葉であった。これは私が育ったところの話で県内にはチドメグサを止血に用いる地区が多数ある。地区それぞれの文化が育っていたのである。花期 6～9月 生育地 庭、路傍 産地 各地散在 方言 トベラクサ、ビルクサ



1984. 10. 1 大和町

だれでも知っている薬草。だが、実物を探すとまがいものがあることが容易ではない。なかには、有毒植物をゲンノショウコと間違えて採集している人もあった。それにしても、無数にある植物の中から効能をどのようにして調べたのだろうか。中国には神農という人が一日に一草ずつなめて効能を調べたという伝説があるが、確かに超人的能力を持った人がいたのだと考えたくなる。ゲンノショウコは夏の土用ごろに採ると効能が高いという。これは体験に基づくのだろう。花期 7~10月 生育地 路傍、荒地 産地 各地散在 方言 イシャダシ



1989. 7. 30 北波多村

イチビ (アオイ科)

時々、畑の中に大きな葉をつけた背の高い雑草ともつかぬものが1~2本生えているのを見ることがある。雑草ならこんなに大きくなる前に取り除くはずなのと思って見ると手抜き畑のようではある。イチビは印度原産で、古い時代に中国経由で導入された栽培植物である。茎の皮をはいで麻のように布または縄をつくり、殻は燃料にした。今では利用されることはないが栽培作物として畑から離れられないまま、かろうじて命脈を保っている。花期 7~8月 生育地 畑、荒地 産地 各地散在



1987. 5. 8 三日月町

マツヨイグサ (アカバナ科)

マツヨイグサは待宵草の意。花は夕方から夜中にかけて咲き、朝方にはしぼむからである。このようなサイクルを示すのはオオマツヨイグサであり、マツヨイグサは午前中も花が開いている。しかし午後になると赤黄色に変色して夕方しぼむ。アレチマツヨイグサは午前中にしぼむ。いずれもアメリカ大陸原産の帰化植物で日本には明治以前に渡来している。歌で有名な宵待草は植物学用語にはないがマツヨイグサを指したのであろう。月見草もこれらとは別種の園芸種である。花期 7月 生育地 原野 産地 各地散在 方言 ツキミソー

オオマツヨイグサ (アカバナ科)



1989. 7. 19 北波多村

花期 7~8月 生育地 原野、路傍 産地 各地散在、北米原産

アレチマツヨイグサ (アカバナ科)



1984. 9. 10 小城町

花期 8~9月 生育地 原野、路傍 産地 各地散在、北米原産



1985. 5. 21 多久市

カタバミ (カタバミ科)

いつもは気にもしないが、庭の草むしりをする段になると、小さなカタバミをどうするか気になる。頼りなげなこの草をむしるにはかなりの根気を要する。どこに全世界に分布するという強じんさがあるというのか。カタバミを踏みしめて歩いているとパチパチはぜる音がすることがある。これは蒴果がはじける音で、種子を遠くへ飛ばして分布を拡大しようとする仕組みなのである。このようにしてまで世界中に広がったわけでもあるまいに。古くはこれで銅貨を磨いた。花期 5～10月 生育地 庭、路傍 産地 各地 方言 コガネグサ



1985. 6. 15 巖木町

モウセンゴケ (モウセンゴケ科)

中学校で教わった食虫植物を見たいという願望はなかなか果たせなかった。植物が虫を食べること自体、珍しく分布もまれなのだろうと思っていた。ところが一度目にふれたら後は次から次にみつかった。生育地の環境が理解できたせいもあるろう。モウセンゴケは何度見ても新鮮な驚きの声を発したくなる。葉は地面に伏せたようになり群生する。さじ形の葉に紫紅色の腺毛があって美しい。少年時代の願望に美しさが加わって発見の喜びが増幅するのである。花期 7～8月 生育地 湿地 産地 鹿島、藤津以外で散在



1989. 8. 29 作礼山

タヌキモ (タヌキモ科)

食虫植物には地上で生活するものと水中で生活するものがある。捕虫様式は地上と水中で異なる。水中ではとりもち方式はない。網かごのような袋に獲物が入るのを待つか誘い入れる方式である。水中での主な獲物がミジンコ類であればこれにふさわしい捕虫様式といえる。水生植物を研究している人によればタヌキモの越冬は茎の一部で行われ、春以後、これが生長して成植物になるという。私は成植物のまま越冬しているのをみたが、これはノタヌキモだったらしい。花期 7~8月 生育地 池沼 産地 各地散在



1987. 6. 13 七山村

ヒツジグサ (スイレン科)

外来のスイレンは葉が盛り上がるように密生する。花も派手。ヒツジグサは葉が水中にあたりして花がないと気付かないこともある。花の径は5センチくらい。このミニサイズを却って賞でる人も多い。ヒツジグサは未の刻、すなわち午後2時ごろに開花することから名付けられているがそんなに正確ではない。午前中は半開状態で、午後になって全開し、同6時ごろに閉花する。これを3日間繰り返し花の寿命を終わる。開閉は植物にとってかなりの重労働と思われるが、それなりの意義があつてのことだろう。花期 7~8月 生育地 池沼 産地 各地散在



1989. 5. 28 小城町

ドクダミ (ドクダミ科)

この草は田舎の家の裏の何となく陰気な場所に生えていた。異臭といい、赤紫色の葉裏といい、生育場所には何物かがひそんでいるように見え、容易に足を踏み入れたくない雰囲気があった。しかし、腫物ができた時などどうしてもこの草にお世話にならなければならなかった。葉をぬれ新聞紙やツワブキ等の葉に包み、火で蒸し焼きにし、患部につけると奇妙に膿を吸い出してくれる。花を余裕をもって観賞できるようになったのは後年になってからである。花期 6～8月 生育地 人家のまわり、原野 産地 各地 方言 トベラクサ



1987. 6. 25 佐賀市

ハンゲショウ (ドクダミ科)

植物の観賞の仕方にもいろいろある。とはいっても花が中心になるのは当然として、観葉植物とよばれる一群があり、葉の形、色、斑入り等の変化を賞でる人も結構多い。このような変化は自然界でまれながら生ずるのでこれらを探し出す努力がなされる。ハンゲショウの場合は、花時になると必ず片白葉が出る。それが当たり前ではあるが、なぜか小面積にしか生育しない場合が多いので珍しさに変わりはない。ハンゲショウ (半夏生) は半夏 (夏至から11日目) に生える、また、半化粧の意とも。花期 7～8月 生育地 池畔 産地 各地散在



1989. 7. 24 小城町

ミソハギ (ミソハギ科)

お盆前に、七山村の地元農家が生産物を持ち寄っている販売所に立ち寄ったらミソハギも並べられていた。この販売所は地元より他地区の人の利用が多いと聞いていたが、他県ナンバーの車もミソハギを買っていた。ミソハギは盆花にされる。どこにでも生育する花ではないので盆花にする地区はある程度限られる。七山村では自生も多く盆花にされている。販売所で買っている人のなかにはそんなこととは無関係に美しいから買っていくという人が結構いるようにみえた。花期 7~8月 生育地 原野の湿地や溝辺 産地 各地散在 方言 ソーハギ



1984. 10. 27 小城町

スベリヒユ (スベリヒユ科)

小学生のころ、運動場の片隅の土をならし、木杵をおいてそこにどんな植物が生えてくるか調べたことがあった。その時最初に生えてきたのがスベリヒユだったと記憶している。約40年も前のことで今とはかなり違った植物構成だったように思う。スベリヒユは日なたの土が固くてひびが入るようなところに平気で生える。葉も茎も肉厚なので乾燥に耐えられる。根を切っても簡単には枯死しない。この太った茎葉を熱湯でゆで、ごまやしょうゆで食べる。ヨーロッパでは野菜として栽培されている。花期 6~9月 生育地 庭、公園 産地 各地 方言 バシカン



1986. 7. 27 小城町

ヨウシュヤマゴボウ (ヤマゴボウ科)

原野や山道が切り開かれた斜面などに生える。競争相手がいないところで他を圧して生育するので目立つ。白い花が咲き、緑の果実になり、やがて紫黒色に熟する。私の子供のころはこの果汁をインクと称し、落書きに利用した。ボールペンの時代には話が通じないだろうが、この果汁をブドウ酒に混ぜて色をつけたというのも今では信じがたい話だ。もともと北米原産。日本には明治初年に渡来したという。子供のころより増えているようにみえるのは開発が進み生育適地が増加しているためか。花期 7～9月 生育地 荒地 産地 各地散在 方言 ヤマゴボ



1989. 7. 30 鎮西町

フジナデシコ (ナデシコ科)

フジ色の花のナデシコのこと。別名ハマナデシコは海岸に多いため。海岸にたくさんかたまって咲いている。これは園芸品種が逸出したのではないかと思えるほどの美しさである。事實は逆。この野生種が庭園に持ち込まれ、観賞用として栽培されている。最近ではナデシコ類に対する評価が変わって、ガンピやマツモトを含め日本野生種は古典植物扱いされ、外来のオランダセキチク(カーネーション)やカスミソウなどがもてはやされるようになった。花期 7～8月 生育地 海岸 産地 東松浦半島沿岸に散在 方言 イソナデシコ



1963. 6 小城市

イタドリ (タデ科)

最近、道路のガードレールに沿ってイタドリの茂みがみられるようになった。谷川の流れがややよどむ小石原にはタケノコのように太い茎が直立して伸びる。葉は節に申しわけ程度についている。子供のころ、この茎をかじって酸っぱさを味わったものだ。また食べることに関心を寄せるようになった。タケノコのようなおいしさを味わったからだ。料理の秘伝は聞かないことにしてその人に原料だけをせつせと提供することになっている。花期 7月 生育地 路傍、林縁 産地 各地 方言 シーカンボ



1989. 9. 10 小城市

カラムシ (イラクサ科)

二つの思い出がある。戦争末期、夏休みにラミー（カラムシの大型の変種だが当時そんな区別を知る由もない）の皮をはいで学校に持っていかねばならなかった。強じんな繊維がどのように利用されたかは知らない。もう一つは戦後はやったウサギ飼いの飼料としてよく利用したことだ。ウサギの餌には乳の出る植物がよいといわれていたがカラムシは例外だ。群生するので生育場所を知っておれば餌探しに苦勞することはなかった。広い葉を手へのせポンポン音を出す遊びもあった。花期 7～9月 生育地 林縁、畦畔 産地 各地 方言 シロンハ



1984. 10. 25 江北町

イヌビユ (ヒユ科)

通常は人家の近くに多い。そうでなくても農耕地に接して生えている。前栽畑せんさいはたけの堆厩肥たいきゅうひが積まれていた所などに特に多い。このような生態をみると完全な野草というより半野菜に近い。イヌビユはヒユ(栽培種)に似た野生種という意であるが、本県の方言にツケナ、ヒューナがあり、ナ(菜)は野菜を意味する。その証拠に、葉をゴマあえや青汁にして食するところや、鹿島地方では、お盆に、ゆがいて精霊さんに供える風習があった。そういうものと知りつつ私はまだ食したことがない。花期 7~10月 生育地 畑地、路傍 産地 各地散在

ホナガイヌビユ
(ヒユ科)

花期 7~9月 生育地 畑地 産地 各地、熱帯原産



1989. 8. 6 唐津市

ホソバツルノゲイトウ
(ヒユ科)

花期 7~10月 生育地 畦畔 産地 各地散在、熱帯アジア、アフリカ、オーストラリア原産



1989. 7. 29 佐賀市



1985. 7. 4 高島

ハマオモト (ヒガンバナ科)

高島の山中を歩き回り、ようやく港近くの砂浜にたどりついた夏の午後、風は強いけれどどうだるような暑さ。小石まじりの砂浜の歩行はきつい。そんな時、ひょっこりとハマオモトの花に出会う。幅の広い豪壮な葉から太い茎、それに比しては低い背丈。花がなければ単にごつい海岸植物の一つに過ぎない。その花からかすかによい香りが漂う。一瞬、涼風が吹き抜けたような気分になる。花はハマユウの語感が似つかわしいように思う。花期 7～8月 生育地 砂礫地 産地 東松浦郡沿海と島に散在 方言 ハマユリ



1989. 8. 24 北波多村

サフランモドキ (ヒガンバナ科)

石垣のまわり、斜面に多く見かける。人家からあまり離れたところにはないことから観賞用だったことは明らか。鱗茎で増殖する種類は外部からの手助けがない限り移動が困難である。サフランモドキは当初、サフランそのものと誤認されて導入された。弘化2年(1845)のこと。サフランそのものは薬用としてかなり栽培されるようになったが野生化するには至らなかった。サフランモドキは観賞用としても特別手をかけられることなく、それなりに自活の道を開きつつあるといえようか。花期 6、9月 生育地 荒地 産地 各地散在



1989. 7. 20 小城市

オニユリ (ユリ科)

畑の隅など人里近いところに多い。これに対しコオニユリは山手に分布する。姿は両者よく似ているがオニユリは葉腋にむかごが作られるのに対しコオニユリはそれが無い。花はより優美である。本県にはその他、より小型のノヒメユリがあるが最近ほとんどみかけなくなった。花色はいずれも赤黄色。歩く姿はユリの花、とは美人の形容であるが、これは白色やピンクの花をつける他のユリの種類をみてのことではないかと勝手に想像している。オニユリも大変美しいけれど。

花期 7月 生育地 原野 産地 各地散在 方言 ヤマユリ、ユリ

コオニユリ (ユリ科)



1986. 7. 29 巖木町

花期 7月、8月 生育地 林縁、原野 産地 各地
方言 ユリ

タカサゴユリ (ユリ科)



1985. 8. 25 小城市

花期 8月 生育地 林縁、原野 産地 栽培種が逸出し、各地で野生化



1983. 7 七山村

早春の白緑色刀状の新芽は他に緑が少ない時だけに目立つ。子供のころ、この新芽を抜き取って口にあて笛にして吹いた。長じて食べることを考えるようになる。あっさりしておいしい。ところで、この植物との関係はこの段階で切れてしまう。なかには、この花が田植えが終わった「さなほり」のころに咲くので田祈禱花と呼んで関心を示す地区もある。近年は日本原産のこれらの花が外国で品種改良され逆輸入されている。そういうことがあっても、人と植物との関係は結構部分的だと思われるのである。花期 7月 生育地 畦畔、路傍 産地 各地散在



1983. 7 七山村

ユウスゲ(キスゲ) (ユリ科)

七山村の檜原湿原は佐賀の高層湿原としてすっかり有名になり、訪れる人も多い。サギソウが咲く8月は他にも多くの花が見られるので来訪者も一番多い。背が高く遠くからでも目立つのは赤橙色のコオニユリと黄色のユウスゲである。なかにユウスゲの花は咲いていなかったとこぼす人もいるが、名前の通り夕方から咲きはじめ、翌日の午前中にしぼんでしまう。だから昼頃に行けば花が見れないわけだ。高いところに分布すると考えがちだが、東松浦郡の海岸地帯にも分布している。花期 7~8月 生育地 原野 産地 富士町、七山村、玄海町等



1989. 7. 11 鎮西町

ウバユリ (ユリ科)

ユリ科といえば単子葉植物。単子葉植物といえばササのような葉と決まっている、と思っていたら、ウバユリの葉は心臓形で網状脈がある。5月ごろの植物探訪会でユリ科の植物と答えると皆さんがげげんな顔をされる。花時にはこの葉も枯れてしまっている場合もある。だから葉(歯)のない老婆にたとえた名前ともいう。地下部には鱗茎があり良質の澱粉が含まれる。これを用いた郷土の銘菜もある。花が咲いたものは鱗茎がからになっているので未開花株を掘り取る。花期 7月
生育地 林内 産地 各地散在 方言 シデ、ヤマユリ



1985. 8. 18 小城町

ヤブミョウガ (ツユクサ科)

ミョウガの名をもつものに他にハナミョウガがある。葉の形がいずれもミョウガに似ているからだ。ヤブミョウガと他の2種は科が異なる。ハナミョウガは全体にすすけた感じなのに対しヤブミョウガは葉に艶があり、花も茎の上部に抜きんでて咲き美しい。まぎらわしい名なのでどっちがどの名だったか混乱することがあるので、私は草姿と名前は逆であると覚えるようにしている。ヤブミョウガは地下茎をひき群生する。藍色の果実もまたよい。
花期 7 ~ 8月
生育地 林下 産地 各地散在



1985. 9. 8 三日月町

ツユクサ (ツユクサ科)

花卉はかれん。ちょっとさわっただけですぐに傷むけれど植物自体はとても強い。畑ではたくさん分枝して畑面をおおうが節から根が出ていて、引っ張ると部分的にちぎれてしまう。全体を取り除くのは大変だ。除草したもの^{たいり}の処理がまた厄介だ。堆肥に積み込んでも簡単には参らない。仕方がないので川に流す。そうすると川っぶちでふえる。方言のミズクサの由来である。とてもツユクサ (露草) というはかない名は通らない。鳥にちなむ方言が多いのは花の形による。花期 7~10月 生育地 路傍、原野、畑 産地 各地 方言 トテッポポ、ザトクサ

イボクサ (ツユクサ科)



1986. 9. 12 小城町

花期 8~9月 生育地 水田沼地 産地 各地散在

マルバツユクサ (ツユクサ科)



1989. 8. 6 鎮西町

花期 7~10月 生育地 海岸、畑地 産地 各地散在



1987. 5. 23 東春振村

イ (イグサ科)

日本の住居はもともと畳敷き。畳表はイから作られる。花むしろも同様である。畳表用は正確にはコヒゲと呼ばれイの品種である。イは水はけの悪い原野あるいは沼地にごく普通で、細い茎が1カ所から何本も伸びたのが群生している。古くはこの茎の中の白髄をとり出して灯心とした。灯心草の別名があるゆえんである。本県では灯心をジミという。ジミないしジミノキと方言でよばれる樹木の種類がかなりある。かつてはイ以外の植物が灯心にかなり利用されていたことがわかる。
花期 7～8月 **生育地** 原野湿地 **産地** 各地散在

ホソイ (イグサ科)

花期 7～8月 **生育地** 水湿地
産地 各地稀産



1989. 8. 11 多久市



1986. 6. 18 大和町

コウガイゼキショウ (イグサ科)

花期 6～8月 **生育地** 湿地 **産地** 各地
類似種 タチコウガイゼキショウ、アオコウガイゼキショウ、ヒロハノコウガイゼキショウ、ハナビゼキショウ



1986. 7. 18 虹の松原

コウボウムギ (カヤツリグサ科)

日本全国至るところの海浜砂地に生える。しなやかで、強じんな葉が黒褐色のシュロの繊維状の葉鞘から出ている。こんなものが生えていたら砂も動かないだろう。しかし、大群落をつくるほどではない。和名コウボウムギは弘法大師の麦という意である。穂の形は麦に似ていても残念ながら内容は伴っていない。1種コウボウシバがある。これは葉の形状がコウボウムギに似ているからである。穂の形状は明らかに異なり、分布も少ない。花期 7月 生育地 海浜砂地 産地 東松浦半島と島



1984. 10. 23 小城町

ハマスゲ (カヤツリグサ科)

ハマスゲは海浜に多く生えるとの意。これは命名者の観察不足によるのではないかと思うくらい。海からの距離には関係なく原野、路傍、畑など至るところに生える。植物も勢いに乗ったのがあって、これらは自分の勢力圏を拡大し続けるがハマスゲもこれに該当するのだろうか。確かにアスファルトを突き破って伸び出す強じんさはある。畑に入り込むと地下部に塊茎^{かいかい}があって除草には苦勞させられる。根を薬用にするが雑草のイメージが強い。花期 7~8月 生育地 路傍、荒地 産地 各地 方言 コーブシ



1989. 6. 5 鎮西町

カモガヤ (イネ科)

古く優良な牧草として導入されたという。オーチャードグラスともいう。牧野植物図鑑には、文久年間アメリカから導入されたとあり、他の専門書には明治初年とある。牧草としてなら、日本で牧畜が盛んになりだしてからということになる。最近では牧草の種類も変わってきているが、それとは関係なしに雑草化している。欧州—西アジア原産。同じ欧州原産でカモガヤと同じ優良な牧草として導入されたチモシーことオオアワガエリは雑草化しているのをあまりみない。花期 5～6月 生育地 原野、路傍 産地 各地

シラゲガヤ (イネ科)



1983. 7 七山村

チゴザサ (イネ科)



1983. 7 七山村

花期 6～7月 生育地 原野 産地 各地散在、欧州原産

花期 6～7月 生育地 水辺、湿润地 産地 各地



1989. 8. 11 小城町

イヌビエ (イネ科)

かつて水田の除草は難儀な作業であった。ヒエ取りは別の意味でも難儀であった。イネとヒエをどのようにして区別するか。現在の農学部の大学生が果たして区別点を知っているだろうか。両方の難儀を救ったのが除草剤である。どのようにしてヒエだけに効くのだろうか。それにしても化学物質の方が両者をより正確に区別しようというのも面白い。ヒエはイネと共生しながら進化する過程で擬態を身につけたのだろう。擬態は生物が生きるためのもつ特性の一つ。花期 6～9月 生育地 水田、畑 産地 各地 方言 ヒエ

ケイヌビエ (イネ科)



1985. 7. 29 福富町

花期 7～8月 生育地 田畔、溝辺 産地 各地

タイヌビエ (イネ科)



1985. 7. 14 小城町

花期 7～8月 生育地 水田 産地 各地



1985. 7. 14 小城町

エノコログサ (イネ科)

肥えた原野や畑に生える。穂の形状に特徴があり子供の目をひく。エノコログサは犬の子草の意で穂を犬の尻尾に見立てたものである。方言のイッコッコ、イヌコロコロ、インコーコー、インコログサ、インボイボイ、インボロジョも同義であり、キツネノシippo、タヌキノシippo、ネコジャラシ、ネココンコン、ヤコンシippoは他の動物をあてた同系列の名である。こうしてみると、雑草としてのイメージよりもペットのようなイメージが強い。この草の持ち味というべきか。花期 6~7月 生育地 野原、畑 産地 各地 方言 上記以外にクサアワ

キンエノコロ (イネ科)



1984. 7. 21 小城町

花期 7月 生育地 荒地 産地 各地

ハマエノコロ (イネ科)



1989. 7. 30 鎮西町

花期 7~8月 生育地 海浜 産地 海岸



1989. 7. 19 鎮西町

シマスズメノヒエ (イネ科)

スズメノヒエとはスズメが食うヒエの意。この名をもつ植物の穂はいずれもよく似ている。原生のスズメノヒエは外来種におされてか山手に見るようになった。そして熱帯アジア原産のキシウスズメノヒエはクリーク辺に、南米原産のアメリカスズメノヒエは路傍に、同じくシマスズメノヒエは原野でそれぞれ大繁茂している。シマスズメノヒエは元来牧草として導入されたものでグラスグラスとよばれる。本県では10年くらい前から目立つようになった。花期 7~8月 生育地 原野、路傍 産地 各地散在



1989. 8. 13 加部島

アオノクマタケラン (ショウガ科)

ショウガ科の花は一見ランの花にも似ている。本種は熊竹とよべる程強勢であることから名付けられたものである。呼子町加部島の田島神社の裏山の自生状況を見ると、林床に生い茂っており樹木類と相まってジャングルの様相を呈している。アオノクマタケランは暖地性植物であり、台湾から北上し、日本海側は佐賀県までで福岡県には分布しない。強勢とされる割には分布域が限られていて、本県では加部島の一部に分布するだけである。どこか気むずかしさを持っているようだ。花期 7月 生育地 林下 産地 加部島



1985. 8. 18 相知町

ガマ (ガマ科)

古事記に^{いなほ}因幡の白兔がワニを欺むいて皮をはがれて赤裸にされている時にガマの穂をつけるとよいと言われ、その通りにしたら元通りになった、とある。ガマの穂は褐色を呈しているが茎の基部には長白毛がある。だから、これをまとったウサギが不器用なら、^{まだら}斑ウサギになったのではないか知らん。穂はかまぼこ状（ガマの穂に似ているためかまぼこの食品名ができた）をなし、太い部分が雌花群、その上の細いのが雄花群。両者の付き方で種類が見分けられる。花期 7～8月
生育地 池沼 産地 各地散在

コガマ (ガマ科)



1986. 7. 29 七山村

花期 7～8月
生育地 沼地
産地 各地散在

ヒメガマ (ガマ科)



1989. 7. 9 鎮西町

花期 7月
生育地 沼地
産地 各地散在

クロカミラン (ラン科)



1983. 5. 29 黒髪山

昭和20年代の後半、私が高校入り立てのころ、ある植物の先生に引率されて黒髪山へ登った。そのころは岩場にまだたくさんクロカミランが自生していた。しかし、先生は学校の教材用として1本しか採集を許してくれなかった。カネコシダ(天然記念物)は自生地すら案内してもらえなかった。このように植物採集のマナーを厳しく教えられた。今ではすっかり姿を消してしまったクロカミランである。採ろうにも採れない。採れない点では今も昔も変わりはないのだが。はて？
花期 6~7月 生育地 岩角地 産地 黒髪山



1986. 7. 17 栽培

ウチョウラン (ラン科)

花期 6~7月 生育地 岩上 産地 多良岳、嬉野町等に稀産



1989. 6. 2 大和町

ポウラン (ラン科)

花期 6月 生育地 樹上 産地 各地稀産

カキラン (ラン科)

ある婦人からカキランの花をみたいと案内を頼まれているが、まだ約束を果たせないままである。カキランにはどこでも出会えるという安心感があるが、いざとなるとそうはいかなくなる。水がにじみ出るような湿地の縁で他の草に埋もれるように生えるため見過ごすことも多い。とりたてた特徴がないようにみえるなかで花色だけは際立っているように思う。きっとその婦人も原色図鑑をみて関心を持たれたのであろう。派手ではないが、独特の花色は日本人好みのように思う。花期 7月 生育地 林縁の湿地 産地 各地散在



1986. 7. 19 雷山

ネジバナ (ラン科)

新しくできたバイパスの出口で停止信号にあい、ちょっと横をみるとシバの中にかくさんのネジバナが咲いていた。ある時は工場の芝生にもたくさん生えているのを見たことがある。シバと相性が良いらしい。最近是这样して造成地で出会うことが多い。ところが何年も経ないうちにそのネジバナが姿を消してしまう。環境が悪いせいではない。かわいい姿を人目にさらしたのが罪をつくったらしい。個々の花はさしたることもないのに全体でみると美しい。こんなアピールの仕方もあるのだ。花期 7月 生育地 原野 産地 各地散在



1989. 7. 19 唐津市

トキソウ
(ラン科)

ある老友のいう。「父の日」には子供達がお父さんの好きなように使って、とお金をくれるので、弁当と少々のお酒を持ってタクシーに乗る。行き先は毎年同じ。山峡深くタクシーを降り、かなり歩く。行き着くところは私だけの湿原。ここで小半日を過ごし、やや肌寒くなったころ山を降りる。お目あてのトキソウはその時期が一番美しい。最近私だけの湿原ではなくなって、と案内してもらったが、かなりの面積で土ごとはぎとられているところもあり、かつての壮観さを想像する以外になかった。花期 6月 生育地 湿地 産地 富士町、巖木町、七山村



1986. 6. 21 七山村

科別分類索引

キク科

ハルノノゲシ	花期 4-7月……4分
オニノゲシ	4-7月……5
シロバナタンポポ	3-4月……6
セイヨウタンポポ	4-6月……7
コウゾリナ	4-7月……7
コオニタヒラコ	4-5月……8
ヤブタヒラコ	4-5月……9
オニタヒラコ	3-5月……9
イワニガナ	4-5月……10
オオジシバリ	5-7月……11
ニガナ	4-5月……11
ヨモギ	8-10月……12
ヒメジョオン	5-8月……64
ノアザミ	5-7月……65
ハハコグサ	4-5月……66
チチコグサ	4-5月……67
チチコグサモドキ	7-9月……67
ベニバナボロギク	7-10月……148
ダンドボロギク	8-10月……149
ノボロギク	4-9月……149

アカネ科

サツマイナモリ	3-4月……13
ヤエムグラ	5-6月……70
ヤマムグラ	5-6月……71
クルマムグラ	5-6月……71
ヘクソカズラ	7-9月……152

ゴマノハグサ科

オオイヌノフグリ	1-6月……14
イヌノフグリ	4月……15
フラサバソウ	3-4月……15
ムラサキサギゴケ	4-5月……16
トキワハゼ	4-11月……17
マツバウンラン	4-5月……17
キュウシュウコゴメグサ	7-8月……156

シソ科

ホトケノザ	花期 3-5月……18分
タツナミソウ	5月……19
ツクシタツナミソウ	5-6月……19
カキドオシ	4-5月……20
キラソウ	3-5月……73
ウツボグサ	6-7月……74
オドリコソウ	5-6月……75
トウバナ	7-8月……158
イヌトウバナ	8月……159
ヤマトウバナ	8月……159

リンドウ科

フデリンドウ	4月……21
--------	--------

ムラサキ科

キウリグサ	3-4月……22
ハナイバナ	3-9月……23
ミズタヒラコ	5-9月……23
ヤマハリソウ	4-5月……25

サクランソウ科

ルリハコベ	4-5月……24
-------	----------

セリ科

ヤブジラミ	4-5月……26
オヤブジラミ	5-6月……27
ジャク	4-5月……27
セリ	7-8月……160
ミツバ	7-8月……161
ハマボウフウ	6-8月……162
チドメグサ	6-9月……163

スミレ科

スミレ	3-5月……28
エイザンスミレ	4月……29
ニョイスミレ	4月……30
ヒメミヤマスミレ	5-6月……30
コスミレ	3-4月……31
ノジスミレ	3-4月……31
ヒメスミレ	3-4月……32
アリアケスミレ	4月……32

ニオイタチツボスミレ	花期 5月 ……33 [♂]	ウマノアシガタ	花期 5—6月 ……95 [♂]	キンエノコロ	花期 7月 ……201 [♂]	ヒメハギ科	
シコクスミレ	4月 ……33	キツネノボタン	4—6月 ……96	ハマエノコロ	7—8月 ……201	ヒメハギ	花期 5—6月 ……80 [♂]
トウダイグサ科		メギ科		シマスズメノヒエ	7—8月 ……202	フウロソウ科	
ノウルシ	4月 ……34	バイカイカリソウ	4—5月 ……49	ユリ科		アメリカフウロ	5—6月 ……81
トウダイグサ	4—5月 ……35	ナデシコ科		ツクシシヨウジョウバカマ	4月 ……56	ゲンノシヨウコ	7—10月 ……164
ナツトウダイ	4—5月 ……35	ハコベ	3—11月 ……50	ホソバナコバイモ	3—4月 ……57	カタバミ科	
ヤマアイ	5—6月 ……79	ウシハコベ	4—6月 ……51	ハマタマボウキ	5月 ……108	ムラサキカタバミ	6—8月 ……82
マメ科		オランダミミナグサ	3—5月 ……51	ノビル	4—6月 ……109	カタバミ	5—10月 ……168
レンゲソウ	4—5月 ……36	ミミナグサ	3—5月 ……52	シライトソウ	5—6月 ……110	バラ科	
ハマエンドウ	4—5月 ……37	ノミノフスマ	4月 ……53	オオバギボウシ	6—7月 ……111	ヘビイチゴ	4—6月 ……86
カラスノエンドウ	4—5月 ……38	マンテマ	5—6月 ……97	ナルコユリ	5—6月 ……112	オヘビイチゴ	5月 ……87
スズメノエンドウ	3—5月 ……39	ツメクサ	4—6月 ……98	アマドコロ	5月 ……113	ヤブヘビイチゴ	6月 ……87
カスマグサ	4月 ……39	フジナデシコ	7—8月 ……177	ホウチャクソウ	5月 ……113	ベンケイソウ科	
ウマゴヤシ	4—5月 ……83	イラクサ科		オニユリ	7月 ……184	コモチマンネングサ	5—6月 ……90
シロツメクサ	4—7月 ……84	ヒメウワバミソウ	4—5月 ……54	コオニユリ	7—8月 ……185	ヒメレンゲ	5月 ……91
アカツメクサ	5—8月 ……85	カラムシ	7—9月 ……179	タカサゴユリ	8月 ……185	ウンゼンマンネングサ	7—8月 ……91
ミヤコグサ	7—10月 ……85	イネ科		ヤブカンゾウ	7月 ……186	ツルナ科	
ユキノシタ科		ツクスズメノカタビラ	3—5月 ……55	ユウスゲ	7—8月 ……187	ツルナ	4—11月 ……99
ヤマネコノメソウ	4月 ……40	カラスムギ	5—6月 ……122	ウバユリ	7月 ……188	センリョウ科	
ツクシネコノメソウ	4—5月 ……41	イヌムギ	4—6月 ……123	ヒガンバナ科		ヒトリシズカ	5月 ……100
タチネコノメソウ	3—5月 ……41	スズメノチャヒキ	5—6月 ……123	スイセン	1—3月 ……58	フタリシズカ	4—5月 ……101
チャルメルソウ	5月 ……88	チガヤ	5月 ……124	ハマオモト	7—8月 ……182	タデ科	
コチャルメルソウ	4月 ……89	スズメノテッポウ	4—5月 ……125	サフランモドキ	6月、9月 ……183	スイバ	5—6月 ……102
オオチャルメルソウ	5月 ……89	オニシバ	6月 ……126	アヤメ科		ヒメスイバ	4—5月 ……103
アブラナ科		コバンソウ	5月 ……127	シャガ	4—5月 ……59	ギシギシ	5月 ……103
ナズナ	3—5月 ……42	ヒメコバンソウ	5—6月 ……128	エヒメアヤメ	4月 ……60	イタドリ	7月 ……178
ハマハタザオ	4—6月 ……43	カニツリグサ	5—6月 ……129	ノハナシヨウブ	5—6月 ……106	ウマノスズクサ科	
タネツケバナ	3—5月 ……44	オニウシノケグサ	5—6月 ……130	ニワゼキショウ	5—6月 ……107	アケボノアオイ	5月 ……104
イヌガラシ	6—7月 ……45	ネズミムギ	5—6月 ……131	キキョウ科		サンヨウアオイ	4—5月 ……105
スズシロソウ	4月 ……45	ナギナタガヤ	5—6月 ……131	ヒナギキョウ	6—10月 ……68	ツクシアオイ	4月 ……105
ワサビ	5月 ……92	カモジグサ	5月 ……132	キキョウソウ	5—6月 ……69	サトイモ科	
ユリワサビ	4—5月 ……93	アオカモジグサ	5—6月 ……133	ホタルブクロ	5—6月 ……69	ショウブ	5—6月 ……114
マルバコンロンソウ	4—5月 ……93	ヤマカモジグサ	6—7月 ……133	オミナエシ科		マムシグサ	5月 ……116
オランダガラシ	6月 ……94	カモガヤ	5—6月 ……196	カノコソウ	6月 ……72	ムサシアブミ	4—5月 ……117
ケシ科		シラゲガヤ	6—7月 ……197	ヒルガオ科		ツクシマムシグサ	5月 ……118
ムラサキケマン	3—6月 ……46	チゴザサ	6—7月 ……197	ハマヒルガオ	5—6月 ……76	ナンゴクウラシマソウ	4—5月 ……118
ツクシキケマン	4—5月 ……47	イヌビエ	6—9月 ……198	ヒルガオ	7—9月 ……157	ヒメテンナンショウ	5月 ……119
ホザキケマン	4月 ……47	ケイヌビエ	7—8月 ……199	ウコギ科		オオハンゲ	5—6月 ……119
キンボウゲ科		タイヌビエ	7—8月 ……199	ウド	7—8月 ……77	カヤツリグサ科	
オキナグサ	4—5月 ……48	エノコログサ	6—7月 ……200	チクセツニンジン	6—7月 ……78	アオスゲ	4—5月 ……120

ゴウソ	花期 4—5月……121	ツボミオオバコ	花期 5—7月……155
アオゴウソ	5月……121	ヘラオオバコ	7—9月……155
コウボウムギ	7月……194	アオイ科	
ハマスゲ	7—8月……195	イチビ	7—8月……165
イグサ科		アカバナ科	
スズメノヤリ	4—5月……134	マツヨイグサ	7月……166
ヤマスズメノヒエ	4—5月……135	オオマツヨイグサ	7—8月……167
ヌカボシソウ	4—6月……135	アレチマツヨイグサ	8—9月……167
イ	7—8月……192	モウセンゴケ科	
ホソイ	7—8月……193	モウセンゴケ	7—8月……169
コウガイゼキショウ	6—8月……193	タヌキモ科	
ラン科		タヌキモ	7—8月……170
セッコク	5月……136	スイレン科	
ナゴラン	6—7月……137	ヒツジグサ	7—8月……171
フウラン	7月……137	ドクダミ科	
シュンラン	4—5月……138	ドクダミ	6—8月……172
ガンゼキラン	5—6月……139	ハンゲショウ	7—8月……173
コケイラン	5月……139	ミソハギ科	
エビネ	5月……140	ミソハギ	7—8月……174
キエビネ	5月……141	スベリヒユ科	
キリシマエビネ	5月……141	スベリヒユ	6—9月……175
タカネ	……142	ヤマゴボウ科	
ヒゼン	……142	ヨウシュヤマゴボウ	7—9月……176
ヒゴ	……143	ヒユ科	
サツマ	……143	イヌビユ	7—10月……180
キンラン	5月……144	ホナガイヌビユ	7—9月……181
クロカミラン	6—7月……206	ホソバツルノゲイトウ	7—10月……181
ウチョウラン	6—7月……207	ツユクサ科	
ポウラン	6月……207	ヤブミョウガ	7—8月……189
カキラン	7月……208	ツユクサ	7—10月……190
ネジバナ	7月……209	イボクサ	8—9月……191
トキソウ	6月……210	マルバツユクサ	7—10月……191
ウリ科		ショウガ科	
カラスウリ	7—8月……150	ハナミョウガ	5—6月……115
モミジカラスウリ	7—8月……151	アオノクマタケラン	7月……203
キカラスウリ	7—8月……151	ガマ科	
ガガイモ科		ガマ	7—8月……204
ガガイモ	7—8月……153	コガマ	7—8月……205
オオバコ科		ヒメガマ	7月……205
オオバコ	5—6月……154		

50音順索引

〈色数字は詳細ページ数〉

ア行

アオカモジグサ	……133	イヌノフグリ	……15
アオゴウソ	……121	イヌビエ	……198
アオスゲ	……120	イヌビユ	……180
アオノクマタケラン	……203	イヌムギ	……123
アカツメクサ	……85	イネ	……198
アキノノゲシ	……4	イボクサ	……191
アケボノアオイ	……104	イラクサ	……73
アサガオ	……157	イワニガナ	……10
アザミ	……65	インコーコー	……200
アスバラガス	……108	インコログサ	……200
アマドコロ	……113	インボロジョ	……200
アマネ	……124	インボイボイ	……200
アメリカスズメノヒエ	……202	ウイキョウ	……78
アメリカフウロ	……81	ウシハコベ	……51
アリアケスミレ	……32	ウド	……77
アレチマツヨイグサ	……166, 167	ウチョウラン	……207
イ	……192	ウツボグサ	……74
イオヅラ	……157	ウバユリ	……188
イシャタオシ	……73	ウマゴヤシ	……83
イソエンドー	……37	ウマゼー	……95, 96
イソナデシコ	……177	ウマノアシガタ	……95
イタリアンライグラス	……130	ウワバミソウ	……54
イタドリ	……178	ウンゼンマンネングサ	……91
イチビ	……165	エイザンスミレ	……29
イッコッコ	……200	エノコログサ	……200
イヌガラシ	……45	エヒメアヤメ	……49, 60
イヌコロコロ	……200	エビネ	……140
イヌトウバナ	……159	エンドウ	……37
		オオアワガエリ	……130, 196
		オオイヌノフグリ	……14
		オオジシバリ	……11

オオチャルメルソウ	88, 89
オオバギボウシ	111
オオバコ	154
オオハンゲ	119
オオマツヨイグサ	166, 167
オオミズゴケ	106
オートムギ	122
オーチャードグラス	196
オカジシャ	99
オキナグサ	48
オドリコソウ	75
オナゴガヤ	124
オニウシノケグサ	130
オニシバ	126
オニタヒラコ	9
オニノゲシ	5
オニユリ	184
オバコ	154
オヘビイチゴ	87
オヤブシラミ	27
オランダガラシ	94
オランダキジカクシ	108
オランダセキチク	177
オランダミミナグサ	51, 52

カ行

ガガイモ	153
カキドオシ	20
カキラン	208
カコソウ	74
カゴソ	74
カサスゲ	120
カスマグサ	39
カスミソウ	177
カズラゴシ	132

カタバミ	168
カニツリグサ	129
カネコシダ	206
カノコソウ	72
ガマ	204
カモガヤ	196
カモジグサ	132
カヤ	114
ガラガラ	42
カラスウリ	150
カラスノエンドウ	38
カラスノカンマクラ	153
カラスムギ	122
カラムシ	179
カンザシギボウシ	111
ガンゼキラン	139
カントリソウ	20
カンアオイ類	104
ガンピ	177
キウリグサ	22
キエビネ	141
キカラスウリ	150, 151
キキョウソウ	69
キシュウスズメノヒエ	202
キジカクシ	108
ギシギシ	103
キスゲ	187
キチギヤ	26
キツネノシっぽ	200
キツネノボタン	96
キツネノマゴ	158
キッチグサ	75
ギボウシ	111
キュウシュウコゴメグサ	156
キランソウ	73
クリシマエビネ	141

キンエノコロ	201
キンポウゲ	95
キンラン	144
クサアワ	200
クサスギカズラ	108
クソカズラ	152
クチナワイチゴ	86
熊竹	203
クルマムグラ	71
クレソン	94
クロカミラン	206
クロユリ	48
クローバー	84
クンショグサ	70
ケイヌビエ	199
ケヤキ	54
ゲンノショウコ	81, 164
コウガイゼキショウ	193
コウゾリナ	7
ゴウソ	121
コウボウシバ	194
コウボウムギ	194
コオニタヒラコ	8
コオニユリ	185
コガネグサ	168
コガマ	205
ゴキョウ	8
コクラン	73
コケイラン	139
コケリンドウ	21
コージブツ	66
コスミレ	31
コチャルメルソウ	88, 89
コナラ	64
コバギボウシ	111
コバンソウ	127

コヒゲ	192
コモチマンネングサ	90
コーブシ	195
ゴーリンゴーリン	154

サ行

サイシン	104
サオトメバナ	152
サギゴケ	16
サギソウ	187
サツマ	143
サツマイナモリ	13
ザトクサ	190
サフラン	183
サフランモドキ	183
サルノタバコ	134
サンガイグサ	18
サンシチソウ	73
サンヨウアオイ	104, 105
シカ	77
シコクスミレ	33
ジジババ	138
ジシバリ	10
シデ	188
ジネ	122
シノハ	102
シマスズメノヒエ	202
ジミ	192
ジミノキ	192
シャガ	59
シャク	27
シュンラン	138
シューセングサ	148
ショウブ	114
シライトソウ	110

シラゲガヤ	197
シロツメクサ	84
シロバナタンポポ	6
シロバナマンテマ	97
シロンハ	179
シーカンボ	178
スイセン	58
スイバ	102
スゲ	120
ススキ	114
スズガラクサ	128
スズシロソウ	45
スズシロ	8
スズナ	8
スズメノエンドウ	39
スズメノチャヒキ	123
スズメノテッポウ	125
スズメノヒエ	202
スズメノヤリ	134
スズラン	140
スベリヒユ	175
ズバナ	124
スマレ	28
スモトリバナ	28
セイヨウタンポポ	7
セッコク	136
セリ	160
セー	160
ゼンモンネギ	109
ソーハギ	174

タ行

タイヌビエ	199
タイリンアオイ	104
タカネ	142

タカサゴユリ	185
タキトバナ	186
タゴヤシ	4
タチネコノメソウ	41
タツナミソウ	19
タネツケバナ	44
タヌキノシッポ	200
タヌキモ	170
タリスグラス	202
タワラムギ	127
ダンドボロギク	149
タンボコ	6
タンボポ	4
チガヤ	124
チクセツニンジン	78
チゴザサ	197
チチコグサ	67
チチコグサモドキ	67
チツチグサ	34
チドメグサ	163
チモシー	130, 196
チャンチャンハガマ	104
チャルメルソウ	88
チョウセンニンジン	78
ツキミソ	166
ツクシアオイ	105
ツクシキケマン	47
ツクシショウジョウバカマ	56
ツクシスズメノカタビラ	55
ツクシタツナミソウ	19
ツクシネコノメソウ	41
ツクシマムシグサ	118
ツケナ	180
ツバナ	124
ツバメ	122, 124
ツボミオオバコ	155

ツメクサ	98
ツユクサ	190
ツルナ	99
ツワブキ	172
灯心草	192
トウキ	78
トウダイグサ	35
トウバナ	158
トキソウ	210
トキワハゼ	17
ドクダミ	172
ドゼン	77
ドッチョイバナ	28
トテッポポ	190
トベラクサ	163, 172
トールフェスク	130

ナ行

ナガミノオニシバ	126
ナギナタガヤ	131
ナゴラン	137
ナズナ	42
ナツトウダイ	35
ナデシコ	177
ナルコユリ	112
ナンゴクウラシマソウ	118
ニオイタチツボスミレ	33
ニガナ	11
ニョイスミレ	30
ニワゼキショウ	107
ニワトコ	73
ニンジングサ	26
ヌカボシソウ	135
ヌスビトバナ	48
ネココンコン	200

ネコノシャミセン	42
ネコジャラシ	200
ネコノメソウ	40
ネコエンド	38
ネジバナ	209
ネズミムギ	130, 131
ノアザミ	65
ノウルシ	34
ノエンド	38
ノジスミレ	31
ノハナショウブ	106
ノヒメユリ	184
ノビル	109
ノボイグサ	70
ノボリグサ	38
ノボロギク	149
ノミノツヅリ	53
ノミノフスマ	53
ノンビー	109

ハ行

ハイカラグサ	18
バイカイカリソウ	49
ハクイ	138
ハコベラ	8
ハコベ	50
バシカン	175
ハタザオ	43
ハナイバナ	23
ハナミョウガ	115
ハハコグサ	66
ハマエンドウ	37
ハマエノコロ	201
ハマオモト	182
ハマスゲ	195

ハマタマボウキ	108
ハマナデシコ	177
ハマハタザオ	43
ハマヒルガオ	76
ハマボウフウ	162
ハマユウ	182
ハマユリ	182
ハルオミナエシ	72
ハルノノゲシ	4
ハルリンドウ	21
ハンゲショウ	173
バラ	65
ヒエ	198
ヒゴ	143
ヒゼン	142
ヒツジグサ	171
ヒトリシズカ	100
ヒナギキョウ	68
ヒメウワバミソウ	54
ヒメガマ	205
ヒメコバンソウ	128
ヒメジョオン	64
ヒメスイバ	103
ヒメスミレ	32
ヒメテンナンショウ	119
ヒメハギ	80
ヒメミヤマスミレ	30
ヒメレンゲ	91
ヒヨコグサ	50
ヒルガオ	157
ビルクサ	163
ヒロハノウシノケグサ	130
ビービーグサ	38, 125
フウラン	137
フウロソウ	81
フキ	160

フキエンゾー	38
フジナデシコ	177
フタリシズカ	101
フツ	12, 114
フデリンドウ	21
フラサバソウ	15
フロフキ	104
フロフシ	104
フーズキ	140
フーズー	36
ヘクソカズラ	152
ベニバナボロギク	148
ヘビイチゴ	86
ヘラオオバコ	155
ペレニアルライグラス	130
ホウチャクソウ	113
ポウラン	207
ホオズキ	154
ホザキケマン	47
ホソイ	193
ホソバツルノゲイトウ	181
ホソバナコバイモ	57
ホソムギ	130
ホタルグサ	98
ホタルブクロ	69
ホトケノザ	8, 18
ホナガイヌビユ	181
ホーソーバナ	36

マ 行

マツバウンラン	17
マツモト	177
マツヨイグサ	166
マムシグサ	116
マルバコンロンソウ	93

マルバツユクサ	191
マンテマ	97
ミズクサ	190
ミズタバコ	23
ミズバショウ	116
ミソハギ	174
ミツバ	82, 161
ミツバゼー	161
ミミナグサ	52
ミヤコグサ	85
ミョウガ	189
ムサシアブミ	117
ムラサキカタバミ	82
ムラサキケマン	46
ムラサキサギゴケ	16
メドウフェスク	130
モウセンゴケ	169
モチクサ	12
モミジカラスウリ	150, 151

ヤ 行

ヤイトバナ	152
ヤエムグラ	38, 70
ヤオヤボウフウ	162
ヤコンクサ	34
ヤコンシッポ	200
ヤハズエンドウ	38
ヤブカンゾウ	186
ヤブジラミ	26
ヤブタバコ	9
ヤブヘビイチゴ	87
ヤブミョウガ	189
ヤマアイ	79
ヤマオモト	115
ヤマカモジグサ	133

ヤマゴボウ	176
ヤマゴンニャク	116
ヤマショウガ	115
ヤマスズメノヒエ	135
ヤマトウバナ	159
ヤマネコノメソウ	40
ヤマニンジン	26
ヤマハタザオ	43
ヤマムグラ	71
ヤマユリ	184
ヤマルリソウ	25
ユウスゲ	187
ユキモチソウ	116
ユリ	184
ユリワサビ	93
ヨウシュヤマゴボウ	176
ヨコツチバナ	74
ヨモギ	12, 114
ヨルガオ	157

ラ 行

ラミー	179
リンドウ	21
ルリハコベ	24
レンゲソウ	36

ワ 行

ワカナ	111
ワサビ	92
ワスレナグサ	22



著者略歴

きだまつ みつを
貞松 光男

昭和11年3月鹿島市生まれ。鹿島高を経て東京農工大卒。農学博士。佐賀植物友の会幹事。現在は佐賀県上場営農センター所長。専門は植物病理。植物、園芸、農業関係の書籍、雑誌に多数執筆。自宅は小城郡小城町畑田2659-2

佐賀の野草 (上) 2～7月編

定価 2,600円
(本体 2,524円)

平成2年4月10日発行

著者 貞松光男

発行 佐賀新聞社

〒840 佐賀市松原1-3-18
TEL 0952-25-4828

印刷 佐賀印刷社

落丁・乱丁の本はお取り替えいたしません



定価2,600円
(本体2,524円)

ISBN4-88298-021-5 C0645 P2600E